

聖なるかな another —森羅万象—

清流

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

神剣使いである神の転生体が四名も集う物部学園。

だが、実はそこにはもう一人、神剣使いがいたのだ。神の転生体ではないが、地位系統でも天位系統でもないという特級の変わり種の神剣の契約者が。

聖なるかなに異物を混入した物語です。サードステイネーションを久方ぶりにやったら、妄想が爆発した結果、生まれました。基本的に原作の流れを踏襲しますし、アンチ・ヘイトは念の為ですが、ところどころ原作から改変する予定です。なんというか、原作で納得がいかない部分が多々ありまして。具体例としてはカティマ&ナーヤが旅団に合流する理由とかです。そういう意味で、オリジナル展開タグもつけております。

オリ主&オリ主最強という地雷臭満載の小説ですが、まあそれでもよければ読んでやって下さい。

※永遠神剣シリーズの盛大なネタバレがありますので、ご注意下さい。原作未プレイな方は読まない方がいいと思います。

目次

| | |
|---------------|----|
| 第00話：蠱毒の世界 | 1 |
| 第一章：平穏なる世界 | |
| 第01話：物部学園 | 19 |
| 第02話：闇夜の狩人達 | 33 |
| 第03話：誤算と異なる覚醒 | 46 |
| 断章：〈鞘〉の眷属達 | 57 |
| 第二章：剣の世界 | |
| 第04話：神剣使い＋1会議 | 65 |
| 第05話：神剣使い＋1会議 | 83 |
| 後編 | |
| 前編 | |

第00話：蠱毒の世界

皆は、『永遠神剣』というものを知っているだろうか？

Xuseから発売されたPCゲーム『永遠のアセリア』から始まった人気シリーズで、その話の中核を担うのが『永遠神剣』である。

この『永遠神剣』、神剣の名は伊達じゃなく、担い手となった者は常人とは比べものにならない超常の力を手に入れる。基本的に一位〜十位（ちなみに《天位》《鞘》《地位》という別格の神剣も存在する）まで存在するのだが、それこそ、三位以上の高位神剣の契約者となれば、契約者は『永遠者』^{エターナル}という存在になり、文字通り不老不死に近い存在になりさえする。三位ですら時を操ったり、予知が可能で、一位では「思った」事を現実に反映することができてしまうなど、トンデモ武器もここに極まれりである。

さて、そんな『永遠神剣』が、いきなり目の前に現れたら、あなたならどうする？

好奇心に任せて、迷わず手に取る？それとも、不可解な現象に逃げ出す？

それが何も問題のない平常時であれば、どちらを選んでもいいだろう。

波乱に満ちた人生が欲しければ前者を、逆に平穏な日常を愛するならば後者を。

いずれの選択であっても、そこに優劣はない。なぜなら、あくまで個々人の価値観の問題であり、それ以上ではないからだ。

だが、その『永遠神剣』の登場場面が絶体絶命の危機であればどうだろう？

それも、『永遠神剣』シリーズおなじみの敵であるミニオンの襲撃の最中であつたなら……。

考えなくても分かることだが、100%罠である。

絶体絶命の危機に覚醒するとか、漫画の主人公でもあるまいし、そんな都合のいいことがあるわけないのだから。

更に言うなら、俺は転生者——といっても、前世の記憶っぽいもの

があるだけで、チートな異能や馬鹿げた才能があるわけではない——というだけで、神の転生体でもないのは勿論、武芸の心得も祖母に精神修養の為に仕込まれた弓道以外にはない。

それに転生したと言っても、この世界には魔法なんてものは存在しないし、前世の世界と多少の差異こそあれど、ほぼ前世の記憶にある現代日本と変わらないときている。

どう考えても、『永遠神剣』を手に入れられるような事情は存在しないのだから。

故に俺が呼び出したとか、俺の求めに神剣が応じたなんて可能性は、万に一つもない。十中八九、何者かに仕組まれたものに違いないだろう。

しかしながら、そこまで理解していても、俺には契約しないという選択肢はなかった。なぜなら、ミニオンは下位神剣とはいえ、れっきとした神剣使いであり、ただの人間が逆立ちしても勝てる相手ではないからだ。

そうして俺は、永遠神剣第十位『無形』と契約したのだった。

『無形』はその名の通り、定形のない神剣であり、下位ながら応用性の高い神剣だ。俺が契約したことでミニオンにどうにか勝てたのもその御蔭だったが、殺したミニオンが消滅すること無く、神剣ごと『無形』に吸収されたことが気にかかった。

そして、それは翌日確信に変わった。

なぜなら、朝食卓で顔を合わせた妹が神剣使いになっていたのを皮切りに、学校でも三桁に近い神剣使いを確認したからだ。これで仕組まれていないわけがない。

幸い、答はすぐに提示された。

その日の夜、夢の中で告げられたのだ——「選ばれし者よ、異世界からの侵略者を倒し、世界を救え」と。

これが前世で、かつ告げたのが狡猾&残虐な白髪の少女でなければ、俺も喜んでそれに従っていただろう。

だが、それは最早ありえない選択肢であった。

妹を巻き込まれたことは勿論だが、それ以上にその聖女然とした白

髪の幼女に俺は見覚えがあったからだ。

『法王テムオリン』——永遠神剣第二位『秩序』の契約者である『永遠者』^{エターナル}だ。

しかも、彼女は単なる『永遠者』^{エターナル}ではない。世界を破壊、マナを回収し、全ての神剣を統べる永遠神剣に帰す事を目的とした集団『ロウ・エターナル』の幹部の一人なのだ。計画や策謀が大好きで『永遠のアセリア』でも色々と暗躍していた。夢の中ではその本性たる狡猾かつ残酷さをおくびにも出していなかったが、実質、『永遠のアセリア』の黒幕と言つて差し支えない人物であるのだ。

さて、そんな彼女が「世界を救え」なんて言うだろうか？
否、断じて否である。

どう考えても、真逆の滅ぼす側であり、毎夜送り込まれてくるミニオン達は彼女の手によるものと見て間違いない。恐らくこの世界は、何らかの要因から、テムオリンに目つけられたのか、さもなければ、単純に運悪く実験場に選ばれたというだけなのかもしれないが……。

いずれにせよ、酷いマッチポンプである——死ねばいいのに。
そうすると、気になるのは倒したミニオンを神剣ごと吸収するという現象だ。永遠神剣がマナを求めるのは本能であり至極普通のことだが、流石に神剣ごと吸収したりなんてことはない。まず、間違いないテムオリンが何か仕込んでいるに違いない。彼女の言葉通りにすることは、嫌な予感がぶんぶんする。

しかしながら、現実問題ミニオンは放置できない。
ミニオンは無差別に人を襲うし、神剣使いとなれば尚更だ。何の力もない両親を、そして狙われるであろう妹を守るために、俺は積極的にミニオンを狩る他無かった。

そうして気づけば三年余り、成人する頃には俺の神剣『無形』は、第六位『千変』に変わっていた。下位神剣が中位神剣に成り上がり、銘まで変わるなど、本来ありえることではない。数多の神剣を吸収してきた結果なのは間違いない。この現象は、俺にどうしようもなく『永遠のアセリア』を連想させた。

ここで少し『永遠のアセリア』について説明しておこう。この物語

の主人公は、第四位『求め』の契約者なのだが、実は彼以外にも幼馴染達が同様に第五位『因果』、第五位『空虚』、第五位『誓い』の契約者であった。彼らは神剣の意思によって殺し合いを強制された。全ては、『因果』『空虚』『求め』『誓い』の四神剣を一つにして、第二位神剣『世界』を完成させるために……。

さて、察しの良い方はすでにお気づきではないだろうか？今のこの世界の状況にそれはあまりにも似通っていないかと。他者の神剣を砕くのもなく、力を奪うだけでもないが、ミニオンの神剣をまるごと吸収し、神剣を強化していく。それは『永遠のアセリア』で行われた四神剣の争いの焼き増しのように、俺には思えてならなかった。毎夜送り込まれた大量のミニオンによって死者も大量に出たが、同時に生き残っている者達は大幅に強化されている。流石に第三位に至った者はいないが、いずれも第四位以下第七位以上の中位神剣を持つ者ばかりだ。そして、昨晩からミニオンの異界からの流入は、今までが嘘のようにピタリと止んだ。これの意味するところは、明白だろう。つまり、お膳立ては終わり、舞台は整ったということなのだろう。

嫌な予感ほどよく当たるとはよく言ったもので、俺の危惧した通り最悪な展開が待っていた。翌日から神剣使い同士による凄惨な殺し合いが始まったのだ。

神剣使い達は、それまでの対ミニオンで共闘してきた友誼を忘れたかのように、人目も弁えず所構わず狂ったように殺し合った。巻き込まれた一般人は数知れず、当然センサーショナルなニュースとなつて、世間を騒がしたのは言うまでもない。思えば、あの時から破滅の序曲は流れ出していたのだ。

で、だ。肝心の俺がどうなったのか、疑問に思ったんじゃないだろうか？

あー、あまり言いたくはないのだが、俺ももの見事に狂ったね。あれだけ警戒しておきながら全く情けない話だが、神剣の凄まじい強制力に抗う術はなかった。それでも俺が神剣に操られるままに、誰も殺さないですんだのは、それまで守ってきた妹の御蔭だった。俺が頑

なまでにミニオンを排除し、戦わせなかった妹の神剣は未だ第十位『平静』のままだったのだが、どうやらそれが逆に良かったらしい。

というか、テムオリンが仕込んだであろう「他の神剣使いを殺せ」という凄まじい強制力は、恐らく七位以上の中位神剣でなければ発動しないものだったのだろう。いや、そもそも低位の神剣は意思が薄いことを考えれば、大量のミニオンを異界から送り込んでこちらの神剣を強化させたのは、最初から抗えないレベルの強制力を持たせる為だったのと考えれば納得がいく。恐らくミニオンの流入が止まったのは、妹の『平静』を除いて、この世界の神剣使いの神剣が軒並み七位以上の中位神剣に至ったからだろう。妹が見逃されたのは、単純に十位など脅威にならず、計画の障害にならないと判断されたからだろう。なにせ一人正気であっても、他の神剣使いが狂っていれば意味は無いからだ。どの道、生きるために殺し合うほかないのだから。

だが、妹はこの世界における最大のイレギュラーだった。

妹は俺に守られており、自ら戦うことはなかったが、その時間を無為に過ごしてはいなかったのだ。妹は、戦えないなりに俺の力になるうとして、『平静』との対話を積極的に行ったのだ。そうして、対話を進める内に最初は片言であった『平静』が明確な言葉を返し始め、ついには普通に話せるようになるまでに至ったらしい。これはこの世界が豊潤なマナを有しているから、可能なことであつたらしい。そのおかげで、『平静』は戦うことなく、他の神剣を吸収すること無く、世界に満ちるマナを細々と吸収することで明確な自意識を確立することができたのだ。そのおかげで俺も助かったわけだが、元をたどればその豊潤なマナのおかげで、テムオリンに目をつけられたのだろうか、善し悪しである。

ところで、神剣使いの強さを決める要素は三つあるのをご存知だろうか？

一つは、契約している『永遠神剣』の位階。基本的に高ければ高い程強い。

一つは、契約者の能力。単なる元学生と神の転生体、どちらが強いなんて言うまでもないだろう。

そして、余り知られていない最後の一つは、神剣と持ち手のシンクロ率だ。

これが顕著な例としては、『カオス・エターナル』で第三位神剣『永遠』の使い手であるアセリアや、第九位神剣『失望』の使い手ヘリオン・ブラックスピリットがあげられる。前者は『永遠』とのシンクロ率の高さから、三位でありながら二位に並ぶ強さを誇り、後者はシンクロ率の上限が超絶で、九位にも関わらず六位神剣『冥加』の使い手ウルカ・ブラックスピリットをも上回り、剣聖となっていることから分かるように、高ければ高いほど能力は変化するらしく、これは時に『位』の壁を越える要素なのだ。

どうしてこんな話をしたかというのと、俺と妹も高い方だからである。いや、妹の方は高いなどというレベルではない。これがあつたからこそ、妹は俺を正気に戻すことができたのだから。十位で六位に干渉し、その影響を打ち消したことを考えれば、恐らくヘリオンと同等レベルであろう。それに加え、『平静』が元々精神に作用する力を持った神剣であることが俺を救ったのだった。

とはいえ、あれだけ警戒しながらも俺が抗えず狂ったのも、『千変』とのシンクロ率の高さ故だったりするので、一概に良い事とはいえないのだが……。

兎に角、俺は守っているつもりだった妹に守られたわけである。兄として何とも情けない話だ。まあ、元より一人で守ってこれたわけではないので、当然のことなのかもしれないが……。

そんなわけで、どうにか正気に戻った俺は妹と相談し、基本籠城することに決めた。実質狂ってしまった神剣使い達を見捨てるも同然だったが、これはどうしようもないことであった。

なにせ、俺と妹以外の神剣使いは未だ狂ったまま殺し合っているのだ。この状況下でのこのこ出て行くのは自殺行為以外のなにものでもない。それにいかにシンクロ率が高いと言っても、『平静』が十位であることは変わらない。とてもではないが、この世界の神剣使い全員を正気に戻すには、力が全くとっていい程に足りなかった。『平静』の言によれば、俺と妹自身、後は精々一人か二人の精神を守るのが限

度であるということだった。

実はこの時、すでにテムオリンの計画は大詰めにきていたのだが、この時の俺はそれを知る由もなかった。

因みに、後の本人の言と『聖威』の言を統合し推察したテムオリンの計画及び『聖威』の動きは、恐らくこういうことだ。

マナの豊潤な世界でありながら、本来神剣も魔法もないこの世界は、テムオリン達『ロウ・エターナル』にとって、絶好の餌場だった。普通なら、世界を滅ぼしてマナを根こそぎ奪い尽くして終わりだったのだが、テムオリンは恣意的に高位の神剣を作れないか実験を思いついていたのだ。その条件として、マナが豊潤で、本来神剣が存在しない世界であることが必要だったのだが、運の悪いことに俺達の世界はその条件に見事に合致してしまっていたわけだ。

第一段階として、テムオリンはコレククションしている神剣の中から対となる四位の天位系統神剣（テムオリンは知らなかったが、片方が地位系統神剣であり、これが原因で後に『聖威』が出張ってくる）を選び出し、その力を細分化して八位以下の下位神剣として、日本のある街にバラ撒いたのだ。その対象となるのは、思春期&中二病&高二病真っ只中の中学生と高校生達だ。良くも悪くも精神的に不安定で心身ともに成長しやすい彼らは、神剣の糧としてはうってつけだからだ。日本が選ばれたのは、治安がよく平和ボケしていて神剣という非日常を受け入れ易い土壌がある為だ。この段階で神剣は契約者を通して、この世界のマナを吸収し世界に適応していった。

第二段階として、細分化された天位系統神剣の残りカスを核に周辺世界から引つ張てきたマナで、大量のミニオンを作成。異界からの侵略者の尖兵として、殺戮の限りを尽くさせる。ミニオンの神剣が吸収されたのは、なんのことはない。元が一つの剣であったが故だったわけだ。とはいえ、俺達の世界の周辺世界の尽くを滅ぼして、確保した大量のマナが注がれた結果、細分化される前と同等の力をもつ神剣が複数本生まれることになったのだが。

第三段階で育った神剣使い達を殺し合わせ、神剣使いをも糧にしてさらに高位の神剣として集約する。つまり、はなからこの世界は蠱毒

の壺だったのだ。

そして、最終段階でこの世界を滅ぼし、残った一本を核にして全てのマナを集約し、高位神剣として新生させる。時間樹エト・カ・リファとしては比べくもない小規模な時間樹とはいえ、時間樹一つのマナを集約させて作る神剣である。流石に一位とはいかなくても、二位ぐらいは作れるのではという目論見だったらしい。

しかし、そうは問屋が卸さない。神剣世界全体に影響をおよぼす存在の排除を行動原理とする地位系統神剣第一位『聖威』の化身フォルロワは、第三段階において、この企みを察知した。と言つても、時間樹エト・カ・リファの保守に全力を上げていた彼女は、最初これを見逃すつもりだった。地位系統神剣の突然変異体第一位『叢雲』、その化身ナルカナを封じる時間樹エト・カ・リファは巨大化し過ぎており、その保守は比べくもない俺達の世界が属する小規模の時間樹の消滅など些事に過ぎなかったからだ。

が、結果として、フォルロワは動いた。バラ撒かれた神剣は、対となる天位系統神剣、地位系統神剣であつたからだ。これが天位系統あるいは、地位系統で統一されていたなら話は別だったが、双方を内包するというのが問題であつた。フォルロワの脳裏には、ナル化マナを操ることを可能とする突然変異体ナルカナの姿が過ぎつたからだ。天位系統と地位系統、両者を内包する高位神剣の誕生。それは第二のナルカナを作り出すことのように思えてならなかつたようだ。

カオス・エターナルの首魁ローガスが来なければ、フォルロワは惨敗し、自爆して相討ちを狙うしかなかつた化物をまた生み出す可能性を、彼女は断じて許容できなかつたのだろう。

悩んだ末に結局、最終段階に至る直前でフォルロワは動いたようだ。俺達の住む時間樹ごと内包する神剣全てを消滅させるという結論を下して。

因みに彼女が動いたことを察知したテムオリン達は、直ぐ様逃げ出していた。奴としてコレクションの神剣を失うのは痛かつたし、計画を潰されるのも業腹であつたようだが、それ以上に『聖威』を敵に回すことの愚に比べれば安いという判断だつたようだ。元より奴も、俺達

の世界の存続させるつもりなど最初から欠片もなかったのだから、当然の判断だったのだろう。

一方、そんなことになっているとは露知らず、俺と妹は生き延びるのに精一杯であった。

籠城していれば安全と思いきや、そんなことは全然なかったからだ。狂気に侵されているとはいえ、神剣使い達の中には対ミニオンで共闘してきた戦友は一人や二人ではない。中には親友と言っている者さえおり、互いの家に遊びに行ったりもした。つまり、妹はともかく俺の存在を知っているのは一人や二人ではなく、当然俺もまた餌として認識されているというわけだ。それでも、俺と妹が束の間の平和を甘受できていたのは、俺のところにと辿り着く前に狂っている者同士が殺し合うことの方が殆どだったからだ。

だが、それもいつまでも続かない。俺の戦友には第四位『万化』を筆頭に、第五位では『灰燼』『夢幻』、第六位『堅固』と実力者が揃っていたからだ。たとえ狂っていたとしても、彼らの戦闘力には陰りがない。いずれ辿り着くのは避けられない未来であったのだ。味方であれば、頼もしい事この上ない彼らであったが、敵となればこれ程厄介な相手もいない。なにせ、お互い手の内を知り尽くしているのだから。

最初に来たのは『夢幻』の少女だった。俺を慕ってくれた一つ下で、妹とも親しい心優しい少女だった。そんな彼女が狂気に侵され、俺へとそのチャクラム型の神剣を向ける。その力は幻惑。精神に作用する幻術使いだ。

俺はそんな彼女を刀状にした『千変』で、迷い無く一刀両断にし、その全てを吸収した。本来なら、こんな簡単にはいかない。彼女の幻術は、精神に直接作用するものであり、幻であつても現実には起きたと心身が判断し傷を負うという恐ろしいものだ。基本的に形状変化による物理攻撃が主体の俺にとっては最悪の相手と言っているだろうか。一対一で戦えば、神剣の位の差もあつて間違いなく俺が負けるであろうから。

だが、生憎と俺は一人ではない。戦場にこそでないが、俺の精神は妹と『平静』によって守られているのだ。つまり、実質二対一であり、今の俺に幻術は効かない。故、幻術を俺にかけたその瞬間は絶好の隙であり、そこを突いたというわけである。

次いで来たのは『灰燼』の青年だった。小中高と同じで付き合いの長い互いに親友と呼べる男だった。その神剣は小剣であり、紅蓮の炎を操る力を持った神剣使い。本来、後衛型で火力担当なのだが、生来の気質から前に出たがる困った男だったが、気のいい奴で思考が暗くなりがちの俺達のムードメーカーだった。

火力に注意しつつ、隙を狙っていたのだが、『灰燼』は後ろから突きこまれた大槍にあえなく貫かれて死んだ。

貫いた大槍型神剣の持ち主は『堅固』の大男。俺の一つ上で、俺達の兄貴分だった男だ。リーダー役こそ、『万化』の持ち主に譲っていたが、肝心な所を締めてくれたのは彼だった。常にその巨体を盾にして俺達を護り、その頼もしい背中から引張ってきた男だ。そんな彼が、後輩を不意打ちして殺し、何の感慨もなくまた俺に槍を向けているのだ。悪夢としか言い様がない光景だった。

だというのに——俺の心はどこまでも平静であった。頭は混乱しているはずなのに、動揺など欠片もなくどこまでも凜いだ心で『千変』を構える。これもまた『平静』の力——戦友で『夢幻』の少女を迷い無く両断できたのも、それで動揺しなかったのも実はこのおかげ——であることは言うまでもないが、この時の俺は知る由もなかった。

『堅固』の大男もまた相性の悪い相手だ。基本、物理オンリーの俺にとって、その名の通り堅固な物理防壁を備え、鍛え抜かれた強靱な肉体を持つ彼は、天敵と言つていい。なにせ、ダメージが通らないのだから、どうやって倒せという話だ。

故、俺にできるのは手数と変則的な攻めで翻弄することだった。連結刃に変化させた『千変』で多角的に変則的に攻めて、けして距離を詰めさせない。接近戦では分が悪いからだ。神剣の位は同等でも、素の肉体の差が大きい為、その部分で負けてしまうのだ。

しばし、一進一退の攻防が続いたが、決着は唐突だった。連結刃で

の負傷を恐れもせず、防御壁を前面に展開した状態で槍を構え突進してきたのだ。その突進を避けることはできなかった。なにせ、後ろには家があったからだ。守るべき妹がいる帰るべき場所が！

俺は覚悟を決めた。槍を肉体で受け止め、動きを止めた瞬間に首を落とすと。密着状態ならば、防御壁も用をなさないし、いかに強化した強靱な肉体でも、斬ることに特化した日本刀形態の『千変』を防ぐことはできないだろう。俺も死ぬだろうが、相討つのは不可能ではないはずだと。

結果を言えば、俺は見事に首を落とした。だが、それは俺の手柄ではない。俺の肉体に当たる寸前で槍を逸らし、衝突前に防御壁を消した大男の手柄だ。俺は何もできなかった。ただ、千載一遇の好機に体が動いてしまったというだけだ。彼が死に様に見せた笑顔と「面倒かけて済まねえな」という声だけが耳にこびりついていた。

彼が己の肉体に吸収されていく様を呆然と見つめていた俺を、現実に戻したのは最後に来た『万化』の女だった。今思うと、恐らくこの時点で生きている神剣使いは、俺と妹と彼女だけだったのだろう。滅びのリミットがすぐそこに近づいていることを、俺はまだ知らなかった。

そこから先で彼女との間に何があったのか、語るのは勘弁し欲しい。

ただ、言えることは彼女こそ、俺が守るべきもう一人であり、妹と共に守ってきてくれた片翼だったということだ。

結果として、俺はそんな彼女を殺し、結局妹さえも守りきれずに無様に生き延び、ただ一人生き恥を晒すことになった。狂えればよかったのだろうが、俺の中に溶け込んだ妹の遺した『平静』が俺に狂うことを許さなかった。

そして、俺の『千?』が最後の神剣となった瞬間、世界に滅びが訪れた。恐らくテムオリンは、この世界の神剣が唯一に統合された瞬間に世界を滅ぼすように予め仕込んでいたのだろう。奴が不在であっても、事を成せるように。後に知ったことだが、ろくに介入もせず

あつさり撤退したのも、すでに仕込みは終了していたからなのだろう。

だが、当然ながら『聖威』の化身フォルロワがそれを許すわけがない。

全ての世界が終焉に向かい、時間樹全てのマナが俺の神剣に収束統合する前に、フォルロワは時間樹を消し飛ばさんとしたのだ。もちろん、時間樹内の世界に存在する俺がどうなるかなんて言うまでもないだろう。

詳しいことは分からないので、これも結果だけを言おう。

時間樹はフォルロワの思惑通り、跡形も無く消滅したが、俺は生憎と生き延びてしまった。それがどういう理由なのか、いかなる力が働いたかも理解できない。

ただ、俺はこう思う。俺を生かしたのは、時間樹の意思だったのではないかと。

テムオリンをはじめとした『永遠者』^{エターナル}達に好き放題に内包する世界を尽く滅ぼされ、マナを篡奪された挙句、神剣の化身に消滅させられんとした時間樹の怒りなのではないだろうか。そして、己を蹂躪した天位でも地位でもない存在に助けを求めたのだ。

そうでなければ、俺に宿るこの力が、あの瞬間流れ込んだ無数の激情が何なのか説明できない。

さて、フォルロワは消滅させた時間樹の中央に無傷で佇む俺を見て、驚愕した。

当然だ、俺は死んでなければおかしいのだから。

「天位にも地位にも属さない神剣!?!——イレギュラーがっ、安定のために死になさい!」

身の丈を超す大剣が振るわれる。その刃は特別だ。特殊な異能が働いている。恐らく、あれを普通の神剣使いが受ければ、間違いなく死ぬだろう。そう、たとえそれが『永遠者』^{エターナル}であっても。あれを神剣で受けてはならないと。

そこまで理解しながら、俺はそれを右手にもった神剣『森羅』であ

えて受け止め、『万象』で剣ごと吹き飛ばす。

「馬鹿な！なぜ受けられ、剣を合わせられるの!? 神剣殺しの権限は確かに働いているというのに！」

なるほど、神剣殺しか。道理で普通の神剣では受けられないと感じるはずだ。

だが、生憎と『森羅』と『万象』はその限りではない。

「この『森羅』と『万象』が天位にも地位にも属さない神剣だと言ったのはあんただ。あんたのそれは、天位と地位に属する神剣を殺すものだからな。どちらにもに属さない剣を殺せないのは当然だろう」

「ありえない！天位にも地位にも属さない神剣——認めない……そんなもの絶対に認めない！」

絶叫と共に振るわれる再びの大剣の一撃を『森羅』を大剣にして受ける。さつき受けた神剣殺しを封じるおまけつきで。

『森羅』と大剣がぶつかり合った瞬間、大剣から神剣殺しの力が失われる。

「——神剣殺しの権限が!? 何をしたの！」

剣から力が失われたのを感じ取ったのだろう。フォルロワが激昂する。

「安しろ、消失したわけじゃない。一時的に封じただけだ」

「私の——『聖威』の権限を封じる!? そんなことできるわけが！」

「〈鞘〉を壊す剣はなく、〈鞘〉は剣を封じるものだろう? 何も不思議な事じゃない。これは当然の摂理だ」

「〈鞘〉!? まさか、まさか貴方!？」

「地位の眷属よ。お初にお目にかかる。今し方、〈鞘〉の眷属となった番外位『森羅』と番外位『万象』と契約した『永遠者』^{エターナル}『調停者クオーン』だ」

わざとらしく気取った言い方をする。別に教える必要はないのだが、あえて教えてやる。この女の行動原理からすれば〈鞘〉の眷属を殺すことは、絶対にできないはずだからだ。

「〈鞘〉の眷属!? 番外位ですって」

「まあ、それはそれとして……死ね！」

案の定、驚愕して動きが鈍ったフォルロワを尻目に、俺は容赦なく『万象』を振るう。こいつとテムオリンだけは、あの世界の、あの時間樹に生まれた者として、未来永劫絶対に許すことはない。それにこいつは神剣宇宙の安定をうたいながら、秩序を犯し恣意的に排除を行い、神剣同士の争いを助長している。〈鞘〉の眷属としても、許容できる存在はない。

「天位、地位が争わないように神剣の力を封じる力を持つ〈鞘〉の眷属が、『聖威』の化身である私を殺して神剣世界のバランスを崩そうと言おう！」

『万象』の一撃を弾き返しながら、そんなことを言ってくるが、俺に迷いはない。

「安心しろよ。お前が死んでも、大半の力を失うだけで『聖威』が滅びるわけじゃないさ。いずれ力を取り戻し、新しい化身が生まれるつてよ。それまで『聖威』には眠っていてもらうだけの話だ」

「ふざけるな！私が死んだら、誰がこの神剣世界の安定を守るといふの？」

「少なくともお前じゃない！大体、秩序を保つ地位神剣に属しながら秩序を犯し、世界を恣意的に滅ぼすお前に神剣世界の安定をうたう資格があるものか！世界の守護者気取りの愚かな化身が、ここで死ぬ！」

「守護者気取り!?私がどんな思いで、この世界を守ってきたかも知らぬ輩が！」

俺の言葉に激情を露わにするフォルロワだが、『森羅』と『万象』と打ち合う度にその力を封じられていることに気づいているのだろうか？

「そんなもの知った事か！大局見ているつもりで目先しかお前には見えてない。お前こそ、神剣世界の害悪だ」

「つく、力が……！勝負は預けるわ。私はこんなところで死ぬ訳にはいかない！」

逃すものか！今回を逃せば、『聖威』の化身であるフォルロワを殺すチャンスは当分訪れない。俺がコイツを殺せるのは、〈鞘〉の全面的な

バックアップを受けられる今しかないのだから。

「転移ができない!？」

「転移だけでじゃない。お前の使うありとあらゆる『聖威』由来の能力は封じさせてもらった。生き延びたいなら、純粋な神剣魔法と神剣の腕で俺を上回ってみやがれ」

「貴方はどこまでも!」

「恨むなら、存分に恨めよ。もつとも、お前に恨まれたとしても、俺は痛くも痒くもないがな」

転移しようとしてできなかったことで、フォルロワは無防備な状態を晒した。殺すならここしかない!

『森羅』と『万象』を共鳴させ、俺が内包する世界からマナを引き出し、膨大なマナを純粋な破壊の力へと変換する。

「今は亡き時間樹に生きとし生ける者達の恨みと滅ぼされし世界の嘆きを思い知れ!

「三千世界に知らしめよ! 森羅万象の理の下、万物は流転する。この理から逃れることは日月星辰、天地すら能わず!」

後に〈万物流転〉と名付ける神剣魔法を解き放つ。マナ存在ならばナルを、ナル存在ならばマナをぶつけるこの破壊の力に抗える者はいない。たとえそれが一位神剣の化身であっても。

フォルロワもそれを理解したのだろう。諦めたかのように目を瞑る。

だが、フォルロワを殺すことはできなかった。なぜなら、すんでのところで転移させられてしまったからだ。

万物を破壊する嵐が消えた後に立っていたのは、笑みを浮かべた赤髪の少年だった。

もつとも、少年なのは外見だけだろう。この少年は先のフォルロワ以上に底知れぬ力を感じる。

少年が何者であるかは、前世の記憶と〈鞆〉が教えてくれる。

「まさか地位の眷属に続き、天位の眷属にしてカオスの首魁に会えるとは思わなかった。『全ての運命を知る少年“ローガス”』。それにて、なんで邪魔した?」

フォルロワを転移させたのは、この少年ローガスの手によるものだろう。俺が封じていたのは、『聖威』の力であって、他の神剣の力まで封じていたわけではないからだ。相当な力と技量が必要だが、外部から転移させるのは不可能ではない。

「悪いけど、彼女をここで失うわけにはいかないんだ。ここは退いてくれないかな？」

ローガスは笑みを崩さず、そう言う。喜怒哀楽の内「怒」「哀」が欠落しているらしいが、何とも胡散臭い男だ。少なくとも友達になりたいたいタイプではない。

「あんたの見る運命にあの女が必要だとも言うつもりか？今すぐ転移先を吐いて去れ。そうすれば、この場は見逃してやる」

「それはできない。それをするならば、はなから助けてはいないよ。それに教えたところで、この場から移動した君にはできないだろう？」

痛い所を突いてくれる。確かに〈鞆〉の全面的なバックアップを受けられるのは、今この時この場所限定である。俺が成り立てにも関わらず、『聖威』の化身であるフォルロワを圧倒できたのも、偏にその御蔭だ。本来ならば、勝負にすらならない。勿論、俺が一方的に惨敗するという意味で。

全ての運命を知るといえるのは、伊達や酔狂じゃないらしい。

「流星は『運命』の契約者と言うべきか？だが、逆説的に言えば今この場でなら、あんたでも殺せるということでもある」

「確かにそうだね。今この場では僕が圧倒的に不利だろう。でも、僕はここでは死なないよ。僕の運命はここにはないからね」

脅迫されたというのに、ローガスが紡ぐ言葉には、なんの怯えも動揺も感じられない。むしろ、確たる自信すら感じた。彼は本当にここで死ぬことはないと確信しているのだ。

そして、俺もそれを内心で認めざるをえない。なにせ勝てるという確信はあっても、殺せる気が欠片もしないのだから。

「ハア、参った。降参だ。なんだか知らないが、あんたを殺せる気がこれっぽちもしない。あんたの言う通り、ここは退こう」

「そうしてもらえると助かるよ」

ローガスは相変わらずの笑顔で、本当に掴みどころの無い胡散臭い男である。どうにも闘志というか、やる気を削がれる。

「だが、覚えておけローガス。次は絶対に退くことはない。万全の態勢を整えて、あの女を殺しに行く。それを邪魔するなら、次は容赦しない。それがあんたであつてもだ、ローガス」

「分かった。彼女にも伝えておくよ。ああ、安心して。君には当分手を出さないように言っておくから」

「余計なお世話だ。どうせ、あの女は俺に手出しできないさ。それをすれば、自らの行動原理と今までの行いを全て恣意的なものであつたと認めると同義だからな」

「まあ、それは否定しないけど。いざとなれば、我が身諸共を厭わないのが彼女だ。くれぐれも油断しないようにね」

そう忠告するように言うと、ローガスは消えた。恐らく来た時間様、外部からの手引で転移したのだろう。カオス・エターナル、分かっていたことではあるが、つくづく油断ならない連中である。

俺もそれに習い、とりあえず近場の時間樹へと転移し、神剣の気配のない適当な分枝世界に入り込み、そして崩れ落ちた。

「はあ、疲れた。くそ、いきなり『聖威』の化身にローガスとか無理ゲーにも程があるだろう！ああ、クソ！あの女はあそこで殺しておきたかった……」

悔やんでも悔やみきれない。すでに消滅した時間樹のマナを通じた〈鞘〉の全面的なバックアップは失われている。今の俺は成り立っての『永遠者』^{エターナル}でしかない。『森羅』と『万象』は共に鞘の直属の眷属で番外位という規格外であり、その力は単純に測れるものではないが、〈鞘〉である神剣『調律』が急速に力を失っている現状においては、二位相当の力しかないというのが現実だ。

これではローガスやフォルロワは勿論、テムオリンにすら勝てるかも怪しい。

まずは『永遠者』^{エターナル}としての力に慣れ、自由に扱えるようにならないとだ。

そして、『聖威』の化身やローガスに対抗できるようにするには、神劍の力を封じる（鞘）の眷属としての力が不可欠だ。今度は『調律』の助けなしに、自力で発現できるようにしなければならぬ。そうでなければ、一位神劍の圧倒的な力で、俺の方が殺されるであろうから。

「まずは『永遠者』^{エターナル}としての力の扱いからか。

ハア、先は長いな。テムオリンとフォルロワの首を取るのは何時になるやら……」

そう言っつて、見上げた空は、いつか見た元の世界と同様に、雲ひとつなく青く澄み渡っていた。

第一章：平穏なる世界

第01話：物部学園

ここ物部学園は異常な学園だ。

別に校風が変わっているとか、学園自体に問題があるわけではない。歴史が古く自由な校風で、生徒会の裁量幅が広いという特色はあるが、これと言った異常はない。問題は、通っている生徒にある。

三年で生徒会長である斑鳩沙月——第六位『光輝』

二年の暁絶——第五位『暁天』

この兩名は、覚醒済の神剣使いなのだ。

正直、これだけで十分過ぎる程に問題で異常だが、現実是非情である。

二年の世刻望——第五位『黎明』

同じく二年で世刻望の幼馴染である永峰希美——第六位『清浄』

残念なことに、未だ覚醒には至っていないものの、この二人もまたれっきとした神剣使いである。

お分かり頂けるだろうか？

一つの世界に四人の神剣使いが散らばっているなどという生易しいレベルではない。

一つの国の一つの街、四人全員が同じ学校に集うなど、これを異常と呼ぼずして何と呼ぼう。

俺達の時と同様に、何らかの作為によって作られた状況であるのは間違いない。

実際、覚醒済みの神剣使いである斑鳩と暁は、他世界からの来訪者であり、それぞれ明確な意図を持っている。

原作『聖なるかな』どおりならば、前者は『旅団』から破壊神の転生体の監視役として、後者は故郷を滅ぼされた復讐の為にその力を利用するために、世刻に近づいたというのが真相だ。

つまるところ、その原因は世刻望の前世にこそあるのだが、覚醒していない上に前世の行いで彼を責めるのは、流石にお門違いだろう。

それに前世が神というならば、世刻だけではない。永峰も含めた神剣使い四人全員が神の転生体である。

まあ、この時間樹エト・カ・リファにおいて、先天的な神剣使いは基本的に神の転生体であるので、当然といえば当然だが。というか、神の転生体が先天的に所持する故に神剣と呼ばれるとここでは誤解されているふしがある。

それにしても、神の転生と言っても、よくぞここまで大物ばかり集まったものだと思う。

世刻の前世は破壊神と言われているが、実際にはこの時間樹に存在する神の力の大元であり、時間樹外の存在であるジルオル・セドカだ。彼が前世で神を殺していたのは私怨だったが、無意識に砕かれた力を取り戻そうとするところもあつたのではないだろうか。ちなみに彼の『黎明』は『叢雲』の眷属である神剣だ。

というか、残りカスで破壊神と言われるレベルとか、元はどんだけ強かつたんだか……。

斑鳩の前世も凄まじい。誕生を司る太陽神と言われるセフィリカ・イルンが彼女の前世なのだが、実際には時間樹と神の創生の為に砕かれたジルオルに力を分け与え慰める姉のような役割をもっており、本来神ではなくジルオル同様時間樹外の存在だ。これだけでも十分すぎるが、彼女は叢雲のナル化マナにアクセスできる「叢雲の器」の神オリハルコンネーム名を持つという特大の厄ネタ持ちでもある。

俺が思うに、人の心配するより、自分の心配した方がいいと思うぞ。永峰の前世は北天神に属する救世の女神であるファイム・ナルスだ。ファイム自体には本来問題はないのだが、セフィリカ同様後天的にヤバイ処理をされている。簡単に言えば、ジルオルスレイヤーの神オリハルコンネーム名である『相剋』を与えられているのだ。実際、ジルオルを殺した張本人である。

ジルオルの転生体の直ぐ側に、天敵であるファイムの転生体がいるとか、どう考えても仕組まれているとしか思えん。

暁の前世は復讐の神であるルツルジ・ソゾアだ。「滅び」の神オリハルコンネーム名

を持つ、ジルオルのライバル的存在であった神だ。「滅び」の神オリハルコンネーム名のせいでそれが自らの身体を蝕み、最終的に避けられぬ死が待っている。元々は自らの滅びに恐怖する事しか出来ないの弱い神だったが、『叢雲』の眷属である『暁天』を与えられたことで一変した。実は南北天戦争——南天神と北天神の間で起こった戦争——でセフィリカと本来の管理神サルバルを殺害した張本人だったりする。

覚醒したら避けられぬ死が待っているとか、救われないにも程がある。でも、こいつが一番穏当な気がするのは気のせいだろうか？

お分かり頂けるだろうか？こいつらが全員前世に目覚めたら、間違いないで殺し合い待った無しである。

しかも、よりにもよって、時間樹エト・カ・リファにおいて絶対的な強制力を持つ神オリハルコンネーム名を刻まれているのだ。前世の因縁なしでも、強制的に殺し合いになりかねないというのが、また酷い。

というか、どいつもこいつも前世に引つ張られすぎだろ。もう少し今の自分を大切にしてやれよ！

ぶつちやけた話、すでに覚醒済で手遅れな斑鳩と暁はともかく、此刻と永峰は覚醒しないまま平穏に生きた方が幸せだと思うわ！

何というか、ゲームの時はそういう話だからとまだ受け容れられたのだが、これが現実の話となるなんとも言えない気分になる。しかも、仮初のものとは言え、今の俺と彼らの関係は教師と生徒だ。守るべき存在をみすみす危険に晒すなら、覚醒阻止して『聖なるかな』を崩壊させるのもありかとすら思えてしまう。何せ巻き込まれるのは、彼ら神剣使い達だけではないのだ。無力な一般生徒も少なからず巻き込まれるのだから……。

だが、それはできない。俺がこの物部学園に来たのは、彼らの為などではないからだ。

全ては〈鞆〉の眷属としての役割を果さんが為、そして、自らの仕出かしたことに對する責任を取るためなのだから。

そうそう、今更だが自己紹介しよう。

俺は『調停者クオン』。〈鞆〉の眷属である番外位『森羅しんら』と番外位

『万象』と契約した『永遠者』であり、今現在は「永森久遠」を名乗り、学校医兼養護教諭をしている者だ。以後、お見知りおき願う。

——何？お前が設定的に一番ぶっ飛んでいるって？はっはっはっ、何を言っているんだろうか？神剣世界最大のイレギュラーの一つである『叢雲』とその眷属や関係者である神剣使い達に比べれば、俺など可愛らしいものだろう。

ここ物部学園には名物がある。才色兼備な生徒会長とか、何故かモテる鈍感野郎とか、ホモホモしい雰囲気を出す美形などである。中でも一風変わっているのが学校医兼養護教諭を務める永森久遠である。彼は医師免許を持ちながら、養護教諭などやっている変わり者である。学校側からすれば、学校医を別に置く必要がないので、ありがたい存在なのだが、普通に考えて医師より薄給な養護教諭に甘んじているのが謎であった。

とはいえ、これは教職員達の中での謎であって、生徒達には関係ない。なにせ、一般生徒達は養護教諭がれっきとした教師であると認識している者は少ないだろうし、いわゆる保険医が誤用であることを理解している者はまずいないであろうから。

まあ、それでも生徒達からはありがたられている。それなりに専門的な処置を受けられるからだ。

原因不明の悪夢に悩まされる世刻望も、その恩恵を受ける者の一人であった。

「先生、すいません。……いつものです」

入室早々力なく少年世刻望は言った。

「分かった。担任には連絡しておくから、少し寝ている。それでも改善せず、あまり酷いようなら言え。早退させる」

「はい。でも、大丈夫だと思えますよ。いつも、ここで休んだ後は、不思議と調子がいいんです」

「そうか。そいつは何よりだが、油断は禁物だ。大人しく寝ている」

「はい」

早々横になり、青い顔で目を瞑る生徒を横目で見ながら、久遠は内心で溜息をついた。

——よくない傾向だ。完全に前世に引つ張られている。もう、いつ覚醒したところで不思議はないな。

——やはり、ルツルジとセフィリカの転生体が、至近にいる影響は大きいか……。まあ、元々ファイムの転生体が隣にいて、半覚醒状態だったんだ。むしろ、よくここまで保ったというべきか？

今し方寝入った生徒はジルオルの転生体であり、完全に覚醒こそしていないがれっきとした神剣使いである。彼の不調の原因である悪夢は、前世であるジルオルの記憶なのだ。

久遠としては、彼の覚醒はある意味待ち望んでいたものなので、本来ならば放置すべきなのだろうが、両親を失っている彼を入学以来面倒を見てきたのも事実であり、多少なりとも情がある。

故、何もしてやらないという選択肢は、久遠にはなかった。

『万象』を瞬時に展開し、保健室を外界から隔離する。これからやることは、誰にも気取られるわけにはいかないからだ。

「と言っても、一時凌ぎでしかないがな」

自嘲するように呟いて、悪夢に魘される生徒の額に触れる。

「今はまだ眠れ『黎明』よ。お前の出番はまだ早い。相応しい舞台になれば、嫌でも主がお前を呼ぶさ」

そんな言葉と共に不可思議な力が接触部から注がれる。それを受けて、悪夢に魘されていた少年の表情が嘘のように穏やかになっていく。

久遠がしたのは、〈鞘〉の眷属としての力を用いた神剣の抑制と記憶の方向性の操作だ。かつては〈鞘〉のバックアップを受けなければ行使不可能だったが、長い時を経た今では本来の封印ではなく抑制に留めるという器用な真似も可能になっている。別段、覚醒を阻害するものではなく、悪影響を与えるものではない。世刻望は、今も現在進行形で前世の記憶を見ているだろう。

ただ、先程とは見ている内容が違う。破壊神としての性を前面に出

した戦いの記憶ではなく、穏やかな日常の記憶だ。

神の日常、それがどんなものであるかは久遠にもわからないが、殺伐とした殺し合いの記憶よりは平和ボケした日本の高校生には、余程受け容れやすいだろう。神剣使いとしての覚醒に伴う前世の記憶の流入が、戦いの記憶になるのは、神剣という武器を介したものである以上、仕方がないことではある。それに蘇る記憶は鮮烈に刻まれたものになるであろうから、必然的に穏やかな日常よりは苛烈な命の奪い合いとなるのは無理も無い話ではある。

だが、そんなものをいきなり見せられて受け容れろと言うのは、精神的に不安定な高校生には些か以上にハードルが高い。血に塗れた己を見せられて、それがかつての自分だなどと誰が認められようか……。

ところで、肝心の久遠の目的だが、〈鞆〉の転生体である『悠久のユーフォリア』と秘密裏に穏便に合流することである。

本来ならば生まれた直後、いや、妊娠直後に母体であるカオス・エターナルである『永遠のアセリア』共々守護するべき存在なのだが、他ならぬ〈鞆〉『調律』自身から、生まれるまでは手を出すなど釘を刺されて自重した。まあ、『聖威』に久遠との繋がりから、ユーフォリアの正体を気取られるわけにはいかないので、仕方のないことだったのだが、当の久遠としては気が気でない。

なぜなら、〈鞆〉『調律』にエターナルの両親の間に生まれる子供として、新しい〈鞆〉として新生するというアイデアを提供したのは、他ならぬ久遠だからだ。といっても、久遠が考えついたわけではなく、知っていただけなのだが、〈鞆〉『調律』からすれば天啓に等しかったらしい。

このことが、久遠当人の神剣世界への転生自体が実は何者にも仕組まれたのではないかと大いに頭を悩ませることになったのは余談である。

じゃあ、生まれた直後からといきたいところだったが、そうは問屋

が卸さない。

ユーフォリアは、その神剣『悠久』共々、両親をはじめとしたカオス・エターナルの保護下にあり、久遠が合流することを阻害した。

久遠は、何を考えているのか分からない胡散臭いローガスを嫌っていたし、怨敵にして仇敵である『聖威』の化身であるフォルロワを殺すのを邪魔された恨みを忘れていないからだ。それでも安全面を考えると、私情を捨てて合流すべきなのだろうが、〈鞘〉の眷属であることから、ロウ・エターナルと激しく争っているカオス・エターナルに与するというのは、色々問題があるのだ。

そも〈鞘〉本来の役割は、天位、地位が争わないように神剣の力を封じることなのだ。いくら〈鞘〉の転生体を守護するためとはいえ、天位系統であるか、地位系統であるかを問わず神剣使いの意思で相争うロウ・エターナルとカオス・エターナルの争いに介入し、一方に与するのは久遠の調停者という役割から許されることではない。それに下手に久遠が介入すれば、ロウ・エターナル陣営もカオス・エターナル陣営もユーフォリアの真価に気づくだろう。それでは神剣同士の争いを激化させる火種となりかねないし、かえってユーフォリアの身の安全を脅かすことになってしまったら本末転倒であるのだから。

そんなわけで、久遠は怪しまれず自然にそれでいて早期にユーフォリアと合流する方法がないかと考えた。そこで考えついたのが、『悠久のユーフォリア』が登場する永遠神剣シリーズ第二作『聖なるかな』に介入することであった。まずは旅団に合流し、彼女が登場する「魔法の世界」まで同道できれば、ユーフォリアとの合流はなつたも同然である。以降は、ユーフォリアを守るといふ姿勢を鮮明にすれば、カオスエターナルに与したのではないと分かるだろう。

何よりも、この方法のいいところはローガスに会わずにすみ、かつ時間樹エト・カ・リファの保守に全力を注いでいたフォルロワへの嫌がらせにもなるという一石二鳥どころか、三鳥にもなることだ。

フォルロワがプロテクトをかけた時間樹エト・カ・リファへの侵入は、時間樹エト・カ・リファの出身ではない久遠には困難だったが、幸

いに彼はそのプロテクトが神剣由来のものであることを前世の記憶から知っていたから問題はなかった。なにせ神剣の能力を封じるのは、〈鞘〉の眷属の十八番である。それが神剣由来のものであるならば、天位系統だろうが、地位系統だろうが封じてみせる自信が久遠にはあった。そも侵入するだけなら、封印する必要すらない。自身へ及ぶものだけ無効化してやればよいのだ。元より肥大化し過ぎた時間樹エト・カ・リファは不安定であり、その為にフォルロワは保守に全力をあげていたという事情があるのだ。その隙を突くなど、すでに『永遠者』^{エターナル}として長い時を過ごした久遠には造作も無いことだった。

そうして、まんまと時間樹エト・カ・リファへの侵入を果たした久遠は、『黎明』と『清浄』の気配を頼りに物部学園のある世界を探し出したのだ。神剣の気配を探し出すのは、封印と並ぶ〈鞘〉の眷属の得意技だ。多少時間は必要だが、そう難しいことではない。

見つけた後は、どうやって物部学園に怪しまれず入り込むかだった。これは中々難題だった。なにせ久遠が『永遠者』^{エターナル}となったのは、成人してからである。元より多少老け顔の彼は、どう足掻いても高校生には見えなかったからだ。つまり、生徒として潜入するのは不可能であった。

ならば、偶然居合わせた者として考えたが、すぐ却下した。偶然居合わせた外部の人間が都合良く神剣使いであるなど、不審に思われないはずがないからだ。

残る道は教職員だったが、これも中々に難しい。教師というのは中々どうして難しい仕事だし、下手に生徒達と触れ合うことで必要以上情を注ぎかねず危険だ。現『永遠者』^{エターナル}で擦り切れているとはいえ、久遠も元は人間である。その恐れがないという保証はないのだから。それにもものべーの異世界行きの際に都合よく学校に残っていられるかも微妙なところだ。

原作『聖なるかな』では、文化祭の準備の為に残っていた百名余りの生徒達と一人の教師が巻き込まれているが、他の教師というか大人が一人もいないという特殊な状況だった。普通に考えて生徒が居残り作業しているにも関わらず教職員が一人しか残っていないという

ことはありえないし、その一人が転生体の内二名と家族同然の親密な関係にある椿早苗であるなど、些か都合が良すぎないだろうか？

ゲームだからと言ってしまえばそれまでだが、久遠はこれを教師達が意図的に選別されたのではないかと推察している。ミニオンの襲撃も、神剣使いである四名の生徒達も、非現実的にも程がある。神の転生体であるから、神剣が使えるなど、いい年した大人が信じるはずがない。中二病扱いされるのが関の山だろう。件の椿早苗であっても原作でその事実をあつさり受け入れられたのは、彼女にとって弟妹同然の者達が、問題の神剣使いだったからこそだろう。

故に、永峰希美の無意識下の願望を汲みとった神獣ものペーは、意図的に受け入れられない者、問題を起こしそうな者を主の主観に従って、意図的に排除——といっても、永峰希美の性格的に死ぬような可能性はないだろう。単純に学園外に飛ばされただけだと思われる——したのでないだろうか。

生徒会長である斑鳩沙月にカリスマがあるのは認めるし、神剣という明確で強大な武力に対する恐怖が手伝ったのも大きいだろうし、唯一の教師にして大人である椿早苗の奮闘も認めるが、それでも二百名近い生徒達を完全に統率するのは、いくらなんでも無理があるだろう。百人いれば、百の個性があるが人間なのだから、二百人もいれば不満が出て当然だし、問題児も出てしかるべきだ。

だが、予め選別されていたのならば、話は別だ。

こう考えると、彼女のクラスメイトが勢揃いしていて、かつ担任であり姉同然の存在である椿早苗が残されたのは分かる話だし、神剣使い達の異世界旅行に巻き込まれた生徒達が基本的に聞きわけがよく、問題行動を最後まで起こさなかったのも納得がいく。

この推論を前提とすると、ただの教職員では排除される可能性が少なく無いと、久遠は判断し、ならば必要不可欠な存在になればいいと考えた。そこで考えついたのが、学校医を兼ねた養護教諭になることだった。医者となれば排除しにくいだろうし、養護教諭ならば生徒達との関わりは傷病の際くらいで基本的に薄く、遅くまで学校に残っていても違和感がない。何より学校内に保健室という自由にできる自

分の城を持てるのは、大きいからだ。医者免許を持った養護教諭などまず存在しないが、けして不可能ではない。

この為の身分を手に入れるための下準備は本気で大変で、いかな久遠といえど半端な苦労ではなかった。

まず戸籍もきっちり整えて、18歳で大検（現高認）を通ったという経歴を作り、実際に大学受験を突破し医大に通い医師免許も正規に取得し、二年の臨床研修も終えた。その後で、大学に入り直し養護教諭一種免許状を取得した上で、物部学園の教員採用試験を突破したのだ。

「前世含めこれ程集中して勉強したことはいまだかつて無い」とは、久遠の弁である。

まあ、その苦労の甲斐あって、世刻望及び永峰希美の両名が入学する二年前に物部学園の学校医兼養護教諭という身分を手に入れたのだった。ちなみに、この時用意した戸籍上では29歳。実に十年以上の歳月を費やしていたりする。蛇足だが、彼は己が老け顔であったことに初めて感謝した瞬間だったりする。そうでなければ、幻術を使って外見を誤魔化せねばならなかったであろうから。

これで後は、世刻望及び永峰希美の接点をそれとなく作ればいいと考えていた久遠だったが、それは思わぬ方向からやってきた。それは、同僚である椿早苗であった。両親を失った世刻望を弟のように大切に思っている彼女は、できれば気にかけてやって欲しいと久遠に頭を下げたのだ。真摯に頭を下げられ、自身にとっても渡りに船の都合のいい申し出となれば、否はない。久遠は快く請け負った。

このおかげで、体調不良の原因である原因不明の悪夢——前世の記憶——についてまで話してもらえる間柄になれたのは嬉しい誤算であった。勿論、久遠が医師免許を持ち、同性であり相談しやすかったというのもあるだろうが、それでも原作では信頼する姉貴分である椿早苗にしか話していなかったことである。それを教えてもらったのは中々に大きいであろう。が、一方でそれは必要以上に親しくなってしまうたということの証左でもあった。

世刻望が保健室に来れば、当然の如く永峰希美をはじめとした他の

神剣使い達も来る。自然と接点は増え、気づけば、会えば話しかけられるくらいの関係にはなっていた。

正直なところ、久遠もこの状況はまずいと思っていなかったわけではない。

だが、今更拒絶するのは不自然に過ぎるし、今までの苦勞が水の泡となってしまう。

しかも、確実に異世界旅行に同道するためには、関係のある程度良好に保っていなければならぬのであるから、どうしようもなかった。

そして、結局関係を断ち切れなのまま、ダラダラと今日まで来てしまった。〈鞆〉の眷属としての力まで使うなど、明らかに入れ込み過ぎだったが、最早久遠はそれについては諦めていた。

「ミニオンは見つけ次第始末してはいるが、この分だとそう猶予はないだろうな。」

……今日か明日には恐らく——！」

そこまでひとりごちた所で、保健室に近づいてくる神剣の反応を久遠は感じとった。

近づいてくる神剣は二つ。急接近しているのが『清浄』で、遅れて続くのは『光輝』だ。間違いなく、永峰希美と斑鳩沙月であろう。どうやら授業が終わるなり、両者は飛び出してきたようである。

「やれやれ、お前は果報者だな。世刻……」

コンコンと控え目なノックの音が響く。いかにもらしいノックの音に苦笑しながら、久遠は入室を許可する。

「先生、望ちゃんは？」

入ってきたのは、やはり永峰希美だった。綺麗に切り揃えたショートヘアに大人しい感じを受ける清楚な容姿が可愛い。人見知りの気こそあるが基本的には明るく優しい少女で、かつ料理上手で家事万能とくれば、彼女に慕われる少年が目敵にされるのは仕方がないことであろう。

もつとも、外見とは裏腹にその目は力強い意思を湛えており、想い人関連となれば、才色兼備の生徒会長と互角に張り合う強さを見せ

る。久遠は、四人の神剣使いの中で最も心が強いのは彼女だと密かに思っていたりする。

「ついさつき眠ったところだ。来てくれたのに悪いが、起こさないでいてやってくれ」

「はい、分かりました。——先生、望ちゃんは大丈夫なんですよね？」

聞き分けがいいのは彼女の美点だが、それでもやはり想い人である幼馴染が心配のようだ。

「……専門ではないから確実な保証はできん。人の心とは兎角厄介なものだからな。」

だが、まあ命に別状はないし、いつまでもこのままということはない

「そうですね……。望ちゃん、早くよくなるといいですね」

「そうだな。永峰、お前が世刻を支えてやれ。大切な誰かが隣にいる。ただそれだけで、人は安心し強くなれるものだからな」

「えっ、それって……どういう意味ですか？」

「どういう意味も何も、そういう意味だが？」

焦って問い返してくる少女に、悪い大人は意地悪げにニヤリと笑う。分かっているだろうと言外に告げながら。

「な、ななななっ「斑鳩沙月、入ります」!!」

顔を真赤にして、動揺する少女の様子を見て楽しんでいたが、それは新たな来訪者によって遮られる。

現れたのは斑鳩沙月、腰まで届く紅の髪が美しい才色兼備という言葉がこの上なく似合う美少女だ。生徒会長を務めるだけあって、優れたいーダーとしての資質を持っていると同時に、学園のアイドル的な存在でもある。世話好きなのはいいが、お節介りで少々見栄っ張りなのが玉に瑕である。

外見と中身が一致した少女で、良くも悪くも気丈で気安い少女だが、男女間の色恋沙汰には疎い。弟に接するような感覚で世刻に接している為、少々スキンシップが過ぎるところがあり、それが原因で永峰の反感を買っていることをイマイチ理解していない。逆境にあっ

て開き直れる強さを持っているというのが、久遠の評価だ。

「やれやれ、千客万来だな。今度はお前か、斑鳩。それから入室許可無く入るな」

どこか呆れたように言っただけでやれば、バツが悪そうに口を開いた。

「あはははー、すいません。望君が心配だったもので……」

「はあ、やれやれ。本当に世刻は人気者だな。そうは思わないかー
—暁?—」

「!——気づかれてたとは思いませんでしたよ」

きまり悪げにドアを開けて、長い黒髪の美少年が入ってくる。

暁絶、世刻望の親友で、二人一緒だと何かとホモホモしい雰囲気醸し出すので、男色の気があるのではと久遠は疑っている。世渡り上手なように見えるが、その実不器用でやせ我慢ばかりしている頑固者だ。復讐という御題目を唱えながら、その実彼は全てを諦めて心を殺しているだけだ。恐らく四人の神剣使いの中で、最も心を偽るのが上手く、同時に最も脆いのが彼だと、久遠は思っている。

「保健室は俺の城だぞ。俺に気取られたくないなら、別の場所で行くべきだな」

「ははは、参りましたよ」

「暁くんも来てくれたの」

「ああ、お前らのクラスの奴に、望の奴が青い顔して保健室に行つたと聞いてな」

「そうなんだ、ありがとう」

「なんでお前が礼を言うんだ?」

「だって、望ちゃんを心配して、来てくれたんでしよう?その気持が嬉しいから……」

そういう少女の顔には、偽りのない深い感謝があった。

「永峰、お前——」

それにどこか気圧されたかのように、漆黒の少年は言葉を失う。少女の裏表のない純粋な感情に嫉妬し、羨望を抱いて。

「暁も永峰にかかれれば、タジタジだな。いつもの余裕が嘘のようだな」

「フフフツ、本当にそうですね」
紅の少女が柔らかく微笑む。漆黒の少年が考えを変えてくれることを願って。

複雑な様相を呈している三者の様子を見ながら、未だこんこんと眠り続ける中心たる少年を久遠は見やる。

——貴重な光景だな……起こしてやるべきか？いや、世刻が眠っているからこそ見える光景か。

「世刻、お前は本当に果報者だよ」

久遠はすぐに思い直し、誰に聞かせるわけでもなく、噛みしめるように静かに呟いたのだった。

第02話：闇夜の狩人達

闇夜の中を高速で疾走する黒い影は、獲物を探して街中を彷徨っていた。

この黒い影の正体こそは、『ミニオン』。

高密度のマナを利用して生み出される存在で、主体性が皆無であり、基本的に創造主に従属する人形の如き尖兵——なぜか、女性の姿をとる。

今回、彼女らが創造主より下された命令は、現地オーダーの「神剣使いの排除」であるが、それは優先目標に過ぎず、基本は「原生人類の無差別の殺戮」であった。

生まれながらにして下位神剣を携えている為、その主体性の無さは裏腹に、常人では全く歯が立たない戦闘力を誇る彼女らにとって、その命令は容易いものはずだったが、上手くいっていないのが実情であった。

本来であれば、物部学園近辺で人々に相応の犠牲を強いていたはずであった。

しかし、生憎とそうはならなかった。覚醒済の神剣使いが二人もいたというのもそうだが、この世界にはそれ以上のイレギュラーが二つも存在していたからだ。

一つは『最後の聖母イヤガ』、永遠神剣第二位『赦し』の『永遠者』エターナル。彼女は力を取り戻すためにミニオンを無差別に喰らっていた。

そして、もう一つは——

天空より、雨の如く銀系がミニオンへと降り注ぐ。

ミニオンは不意をつかれたものの、それを鋭敏に察知し見事に回避してのける。

——が、それは誘い込まれたに過ぎなかった。

ミニオンが着地した瞬間に地面が爆ぜる。

真下から現れる無数の銀系が現れ、それは容赦なくミニオンを貫き斬り裂いていく。

それは斬殺というのも生温い。断末魔をあげることすら許さず、銀糸はミニオンを瞬時に細切れにし、マナの残滓へと変える。

その様は、滅殺とでもいうべきであった。

「これで今宵は五体目か。思ったより多く入り込んでいるな」

闇夜の深い影から姿を現したのは、白衣を着た黒髪の男だった。年の頃は二十代後半と言ったところだろうか。一見、瞑目しているかのような糸目が特徴的であった。

とはいえ、ミニオンの凄惨な散り様を見ながらも、その表情には何の感慨もなく叫び声すらあげないのだから、只者であるはずがなかった。

まあ、それも無理は無い。この男「永森久遠」は、ミニオンを散々葬ってきた者だからだ。そんな彼が今更、ミニオンの散り様に心動かされることなどない。

ただ、事実のみを淡々と確認しただけなのだ。

先の銀糸の正体は、六位神剣『千変』を変化させたものである。

本来の得物である『森羅』でも『万象』でもないのは、万が一にも気取られる可能性を排除するためだ。〈鞘〉の眷属で番外位と契約した『永遠者』^{エターナル}というありえない存在である己の正体を可能な限り隠蔽するべきだと、久遠は考えているからだ。

実際、久遠の正体を知る者は少ない。

『永遠者』^{エターナル}であることは、テムオリンをはじめとしたロウ・エターナル達も把握しているだろうが、〈鞘〉の眷属で番外位の契約者であることまでは、ローガスと『聖威』の化身フォルロワしかいないのだ。

そして、この時間樹エト・カ・リファにおいても、基本的に正体を明かすつもりはない。原則として、六位『千変』と四位『万化』を持つ神剣使いとして振る舞うつもりである。戦闘においても同様で、必要以上にでしゃばる気はない。久遠が本気を出せば、この時間樹では創造神『星天のエト・カ・リファ』か『叢雲』の化身ナルカナ以外は、はつきり言って敵ではない。

元より『永遠者』^{エターナル}と普通の神剣使いの間には絶対覆せない差があるのだから当然だ。それが時間樹そのものを内に内包するという特性

から常に十全の力を振るえる久遠となれば、どうしようもない現実であつた。

時間樹エト・カ・リファの法である「オリハルコンネーム神名」を刻まれていれば、一縷の望みはあつたらうが、一位『聖威』の力すら封じることすら可能な久遠にとつて、二位『星天』の力を無効にすることなど造作も無いことであり、意味のない仮定である。そのせいで「神獣」すらいないが、『森羅』も『万象』も化身化できるので、誤魔化すのは簡単である——もつとも、『森羅』は化身になることはほぼありえないだろうが……。

というか、「神獣」というシステム自体が「オリハルコンネーム神名」と同様に時間樹外から侵入する『エターナル永遠者』の力を削ぐためのものなのだろうと久遠は推察している。「オリハルコンネーム神名」と「神獣」、実によくできた守護システムであると久遠は思う。

時間樹エト・カ・リファの存在である神々にとつて「オリハルコンネーム神名」は、力を増幅すると共に転生を約束する祝福というべきものでもあり、「神獣」は心強い守護獣であり、神剣の力の使い方を教え補助してくれる優秀なサポーターであり、神剣の意思を代弁してくれるありがたい存在だ。

だが、高位神剣の契約者である『エターナル永遠者』にとつては、真逆に働く。オリハルコンネーム「神名」は侵入する際に刻まれるもので、否応無く力を一定以下に制限される枷でしかない。

「神獣」はもつと悪い。そも『エターナル永遠者』である以上絶大な戦闘力を誇るのであり、守護獣など必要としないし、神剣の力の使い方など今更教えられるまでもない。そして、高位神剣は強固で明確な意思を元よりもつており、代弁者など必要としないのだから。要するに『エターナル永遠者』にとつて「神獣」は無駄に神剣の力を分割するだけの存在であり、デメリットしか無いのだ。「神獣」によって強化される『エターナル永遠者』がいたとしたなら、それは『星天』以外にはありえないだろう。唯一の例外として、『叢雲』とその眷属も強化される可能性があるが、時間樹エト・カ・リファの存在理由を考えると怪しいところである。

片や、「神名」と「神獣」によって、外部（星天）から大幅強化された時間樹内の神剣使い（神or神の転生体）と、此方、外部（星天）から制限を受けて大幅な弱体化した不法侵入者である『永遠者』^{エターナル}。永峰希美の強化ぶりとユーフォリアの弱体化ぶりを見るに、どちらに軍配が上がるかは微妙なところだろう。

その上、そも侵入の為に、フォルロワの外部からの侵入者を排除するプロテクトを突破せねばならず、仮に突破しても、一定以上の力量の侵入者には、排除のためには抗体兵器が大量に送られるという徹底ぶりである。これでは、いかな『永遠者』^{エターナル}達といえど、侵入には二の足を踏むだろう。原作『聖なるかな』で時間樹エト・カ・リファ内部にイヤガとユーフォリア以外に、外部の『永遠者』^{エターナル}がいないのも無理もない話である。

流星は、あのフォルロワがローガスの援助を受けて構築し、エト・カ・リファが親友の為に全力を尽くした『叢雲』の寝所である。非常によく出来た保守システムであると言えよう。

まあ、それはそれとして、このミニオンは全くの別口なわけだが、久遠の知ったことではない。

もつとも、久遠の目的を考えれば、世刻達の覚醒を促すきっかけとなるミニオンは本来は放置すべきだ。別に自分に刃を向けたわけでもないし、縁者が害されたわけでもないのだから。

だが、彼にとってミニオンは、目的云々以前に見つけた瞬間に殺すべき存在だった。青春の三年間をミニオンを殺すことをライフワークにしていたのは伊達ではないのだ。イヤガのように積極的に狩りこそしないが、自身の目に入ってきたものを見逃す道理はない——どうせ見逃したところで、イヤガの餌になるのだし。

「暁と斑鳩も頑張って入るようだが、いかんせん人手が足りない。まあ、流星に二人だけではな。やはり、世刻は神剣を抜くのは防げなかったか……」

久遠の脳裏に蘇るのは、今朝神獣レームを侍らせて登校して来た世刻望の姿だ。その意味するところは、覚醒が間近になったということにほかならない。原作どおりミニオンと遭遇し、永峰希美を守る為

に神剣『黎明』を抜いたのだろう。現状のレーメは常人には見えないようなので、完全な覚醒には至っていないようだが、最早完全な覚醒は秒読みと言っている状態だ。

同時にそれは『聖なるかな』の始まりであり、きつかけとなる異世界旅行がそこに迫っているということでもあった。

その為、すでに保健室には大量の医薬品が搬入されているし、学校の倉庫には久遠が主張して貯蔵させた大量の非常食が貯蔵されている。園芸部の顧問を務めることで、各種の野菜の種や苗等も確保している。異世界での財貨として用いるために、金塊をはじめとした貴金属さえも幾つか用意済という周到振りであった。

ここまで用意周到だと色々疑われそうだが、元々久遠は時間樹エト・カ・リファの外からやってきた存在である。そろそろ離れるつもりで用意していたとか言えば、容易に誤魔化せるだろう。他のことも言い逃れは容易い。例えば、大量の医薬品は発注ミスということにしてしまえばいいし、非常食の大量貯蔵にいたっては誤魔化す必要すらない。地域の防災的な要請と学校の方針であると普通に事実を伝えればいいだけだ。

どこをどうつついても、久遠がものべーによる異世界旅行を想定していたなんて証拠は出てくることはない。彼個人が異世界旅行をすることを想定した準備の証拠は見つかっても、一般生徒を巻き込んで学校ごと異世界旅行することを想定して準備していた証拠など、絶対に出てくることはない。

——創世神エト・カ・リファであっても、俺の目論見を看破することはできない。

どこかに見落としがないかを確認しながら、そんなことを思っていた矢先、久遠は覚えのある神剣の気配が接近してくるのを感じとった。

「この気配は『暁天』か、だとすれば暁か。あいつも毎度ご苦労なことだ。利用しようと近づきながら、それに徹することができないのだからな。あいつも中々に屈折している。……難儀なことだな」

そう自嘲するように独り言ちた後、久遠は気配を消し、素早くその

場を離脱する。

今はまだ正体を気取られるにはいけないからだ。

「何もいないだと……。ナナシ、確かにこの辺りで神剣の気配を感じたのだな？」

久遠が離脱して間もなく、漆黒の少年が姿を現したが、そこには何も無い空間が広がっているだけだ。最早、マナの残滓すら感じ取れない。

普段とは異なり、殺伐とした雰囲気を感じ、漆黒の戦装束に見を包んでおり、その腰には強大な力を持つ一刃があるが、それは間違いない。恐らく先のミニオンを追っていたのだろう。

「はい、マスター。間違いなくミニオンのものであったと思われるます」

その側に侍る妖精を思わせる人型の神獣ナナシが、主の問に答える。

「だが、現実には影も形もない。斑鳩であれば、俺から逃げる必要はないはず。

やはり、俺達意外にもミニオンを狩っている者がいるのか……」

斑鳩沙月は彼にとつて面倒な相手ではあるし、最終的には袂を分かつ相手ではあるが、現段階では敵対する意味は無く、互いにミニオンを狩っているのは知っているので、逃げ隠れる意味もない。

で、あれば、逃げ隠れしなければならぬ別の誰かがいると考えるのが自然である。

「此度のようなことは一度や二度ではありません。その可能性は高いかと思われます」

長年連れ添ってきたナナシの分析も、それを肯定する。

正体不明の存在に、絶はなんとも言い難い不快感を感じ、小さく舌打ちする。

「チツ、やはりそうか。最初は望の奴の仕業かと思ったが、そうではないようだしな。しかし、俺達以外の神剣使いがこの世界にいうとはな」

早々遅れとるつもりはないし、相応に腕の覚えもある為、それ程危機感をもっていないが、それでも予想外&想定外の相手がいるのは面白いことではない。

「マスター、くれぐれも油断召されませんよう。相手は私の探知を掻い潜り、マスターが駆けつけるよりも速くミニオンを殺してのける相手です」

が、対照的にナナシは酷く警戒していた。正体不明の神剣使いの所業が容易ならざることを彼女はよく理解していたからだ。

「フツ、心配するな。別に油断しているわけではない。俺の目的を邪魔するならば、誰であろうと斬り伏せるといっただけだ。そういう意味では、相手が誰であろうと同じだからな」

「……マスター」

なんでもないことのように言い切る主に、神獣は内心の憂いを深くする。復讐に囚われて心を殺し、逃れ得ぬ死の運命を背負う。あまりにも救われないその生き様に……。

「昨日、望が神剣を抜いたのは間違いない。自分のためではなく永峰を守るためというのが、いかにもあいづらい。……待ち望んでいた時は、もうすぐそこだ」

ナナシは前半部分が誇らしげであったことと、待望と言いながらどこか寂しげな表情をしていたことに気づいていたが、それを指摘することを主が望んでいないことを汲んで、ただ黙って傍に寄り添う。

「……」

「——斑鳩、永峰、そして望。すまん、俺は結局生き方を変えられないらしい」

その寂しげな独白は誰に届くこともなく、夜の闇へと溶けていく。

どんなに願っても、時の歩みを止めることはできない。

全て望み通り事が進む程、現実は甘くなく世界は優しくくない。

それは人間だろうと、神の転生体だろうと、『永遠者』^{エターナル}であろうと変

わらない。

いや、『永遠者』^{エターナル}の中には、時間に干渉できる者もいるので、可能性はゼロではないかもしれないが、それでも神剣世界全体の時を操ることは不可能であろう。

まして、万事思い通りにすることなど、『永遠者』^{エターナル}であっても到底不可能だ。どれだけ完璧な計画を立てても、どこか綻びができるのが現実だ。実際、策謀に長けたテムオリンが『世界』を完成させることは成功しても、新たなカオス・エターナルを誕生させてしまったように。そして、それはどれだけ強力な力を持つても同じことだ。思うだけで現実にしてしまう力を持った第一位『宿命』の『永遠者』^{エターナル}であるミューギイが、怒ることも絶望することも許されなくなつて苦悩することになつたように。

故、テムオリン程策謀に長けず、ミューギイ程圧倒的な力を持つていない俺が、思うように事を進められないのも仕方のない事かもしれない。

いや、本当は分かっている。俺のこれは、情けない泣き言であり、単なる我が儘で甘えであり、心の贅肉だ。

己が身に課せられた使命を理解しながら、それでも本来必要のない、必要以上の介入をしてしまうのは……。

運命の日は唐突に始まった。放課後、突如として物部学園を包み込んだ夜闇によつて、運命の火蓋は切つて落とされたのだ。

同時に現れる大量のミニオン達。俺達、神剣使いにとっては数を頼みにしない限り雑魚でも、常人でしか無い生徒達にとっては、絶対の死神だ。

その牙が一齐に剥かれようとしたその時——

「……みんなには、指一本触れさせないからッ！」

それに割つて入ったのは、その神剣の銘のままに光輝く剣を携えて、屋上から校庭に舞い降りた斑鳩だった。

俺の目から見ても、ミニオンをその圧倒的な力で薙ぎ払つて生徒達

を守るその様は、紅の戦乙女とでもいうべき強さと気高い美しさがあつた。

流石は、四人の神剣使いの中で最も総合力が高いだけはある。不定形である『光輝』をよく使いこなしていると言つていいだろう。

が、生憎とこれは――

「斑鳩はよくやってているが、十中八九これは陽動だな……」

斑鳩の奮闘ぶりを余所に、冷徹に考えを巡らし戦況を分析する。

エヴォリア達の目的はジルオルの覚醒であることは、間違いない。であれば、生徒達を狙つた正面作戦は目的にそぐわない。有象無象の生徒達など、エヴォリア達には何の価値もないのだから。

故、このミニオンによる数を頼みにした正面攻撃は、エヴォリア達『光をもたらすもの』の天敵である『旅団』メンバーであり、最大の障害たる沙月を釘付けにするための陽動以外に考えられない。恐らく、ジルオルの覚醒を促す本命は、真逆の方向から少数でこっそり侵入しているのだろう。

でなければ、世刻の最後の覚醒を促すことになる校内に侵入したミニオンの存在を説明できないし、斑鳩がみすみす校内への侵入を見逃すとも思えないからだ。

「本当は斑鳩も気づいているんだろうが、それでも目の前の生徒達を見捨てられんか……。甘いといえば甘いが、俺も人のこと言えた義理じゃないからな。それに今後のことを考えれば、必要不可欠なことでもある。

さて、俺はどう動くべきかね？」

物部学園の者にとっては不意打ちでしかないが、生憎と俺にとってはそうではない。

前世の記憶から、大まかな未来を知っているという絶大なアドバンテージを持っているのは伊達ではない。襲撃があると知つていれば、予め備えておくことなど造作も無い。元より準備万端で待ち伏せしていたようなものだから。

『千変』の系は、学校中に張り巡らしてある。すでに物部学園は俺の領域だ。

その気になれば、陽動・本命を問わず、一瞬で侵入してきたミニオンを殲滅できるだろう。

「手助けしてやりたいのは山々なんだが、殲滅するわけにもいかなんだよな……」

だが、それはできない。

今日この時に世刻と永峰には、神剣使いとして覚醒してもらわねばならない。特に後者の神獣ものべーは学園生徒達の命綱でありインフラ維持の要であることに加えて、時間樹内の様々な世界を旅する為の重要な移動手段でもあるのだから。永峰には悪いが、あのご都合主義の具現のような利便性をもった神獣を逃す手はない。

全てが原作『聖なるかな』通りに行くなどとは思っていないし、そうさせるつもりもない。が、なんだかんだ言っても、結局俺にとつて最も優先されるのは、ユーフォリアとの合流なのだ。兎にも角にも、彼女と合流できる魔法の世界までは、是が非でも行ってもらわねばならない。その為には原作『聖なるかな』の流れを崩さない方が予測がつきやすく、都合がいいのだ。故に二人には悪いが、多少強引でも覚醒してもらおうほかない。

一方の斑鳩は斑鳩で、助けられない理由がある。

先述したように、今後を考えれば、その戦いぶりと絶大な力を生徒達に見せつけてもらわねばならないからだ。

これは偏に一般生徒達の統制の為だ。

神剣使いの戦闘力と脅威を最初期に生徒達に見せつけることは、互いの立場をはつきりさせておくという意味で重要かつ必要不可欠な事だ。守る者と守られる者、その差は絶対に覆せないものであり、両者が逆になることは絶対にならないのだと理解してもらわねばならない。その理解があつたからこそ、原作中で生徒達は斑鳩の言葉を信じ、不満を抑えて耐え忍ぶことができたのであろうから。

当然ながら、現状で覚醒すらしていない未熟な神剣使いである世刻や永峰には、絶対に不可能な役目だ。いや、正確にいうならば、斑鳩沙月にしか務まらないというべきだろう。

元より生徒会長という生徒をまとめる立場（生徒会長になれるだけ

の人望とリーダーシップを持つ）にあり、かつ、誰の目にも分かる形で生徒を守る為に戦った実績が必要とされるからだ。

そして、神剣使い達にとつても、守るべき存在が素直に言うことを聞いてくれるのは大きい。てんでバラバラに逃げられるより一所に集まってもらった方が遥かに守りやすいのだから、当然だ。元より敵の主力であるミニオンは物量で圧倒するのが有効的な使い方であるし、分散されてしまつては個々の質では負けなくても、手数が足りなくなるのは必至だ。確実に取りこぼしが出る。それでは一般生徒達を守り切れない。

よつて、そういう意味でも、ここでの明確な線引は必要不可欠なのだ。

そんなわけで、斑鳩にもいたずらに助力するわけにはいかない。

無論、どちらも万が一の時は助けるつもりで準備はしているので、完全な放置というわけではないが……。

「やはり、見ているだけで生徒任せというのは、教師としての沽券に関わるな。あの様子なら大丈夫だとは思うが、少しくらいは手伝つてやるか」

現状、手持ち無沙汰で、見ているしか無いとはいえ、我ながらどうにも甘い。

イレギュラーである俺が手を出すこと無く、原作通りの展開になるのが一番好ましいと理解しながら、手を出さずにはいられないのだから。

——やはり、少し深入りし過ぎたか……。

内心で自嘲しながら、自らの神剣を召喚する。

『千変』は校舎の防衛及び万が一のサポートの為に用いてしまつて
いる。

故、ここで用いるのは「彼女」の『万化』だ。

天位系統神剣第四位『万化』、手袋型で神剣自体に攻撃力は皆無だが、その能力は単純にして強力無比だ。赤・青・緑・白・黒、あらゆる属性の攻撃・補助・防御を炎・氷・風・土・水・雷・光・闇でなすことができるのだから。すなわち、相手に合わせて弱点を突くこのと

のできる極めて汎用性・応用性の高い神剣と言えよう。

俺が使っていた『千変』とは対極の神剣であり、相互補完の意味でこれ以上無く相性が良かった。少なくとも俺は「彼女」と組んでいる時は負ける気がしなかった程である。

今より使うのは、光の槍だ。斑鳩の『光輝』の攻撃に織り交せて攻撃する。

多少、不審に思われるかもしれないが、今の斑鳩にそれを気にしている余裕はあるまい。

密集したミニオンを斑鳩が大技で薙ぎ払うべく、神獣ケイロンを具現化させる。

斑鳩を中心に凝縮されるマナをこっさりブーストし、技の威力を高めてやる。

次の瞬間、光が視界を埋め尽くしたが、それに慌てること無く、むしろ斑鳩の視界が潰れていることを好機として、討ち漏らしや死にかけに容赦なく用意しておいた光槍を撃ち出し、串刺しにしてマナの残滓へと変える。

距離が離れ過ぎていて、消滅するのが不自然な奴は適度にダメージを与えておく。どうせミニオンには、斑鳩の攻撃としか認識できないだろうから、俺の存在が露見する危険はない。

——さて、ここまでしてやれば……。

思った通り、斑鳩はその獅子奮迅の戦いぶりで程なくミニオンを全滅させた。やはり、どうも違和感があったのか、少し首をひねっていたが、それでも神獣に何かを指摘されると、慌てたように校舎に入っていく。恐らく世刻達のもとに行くのだろう。

「本来の流れより、少しばかり合流が早まったはずだが、さて吉とでるか凶とでるか」

現状の実力では、たとえ斑鳩の合流が多少早まったとしても、状況は変わらない。単純な戦闘力では、暁が間違いなく最強である上に、世刻との共闘というのが斑鳩の足を確実に引っ張るからだ。神剣使いとして覚醒したとしても、現状の世刻では明らかに足手まといであり、共闘のメリットはない。ぶっちゃけた話、世刻には自衛に専念さ

せて斑鳩一人で戦った方がまだ勝機があるくらいだ。俺の助力で、原作よりも多少なりとも余力はあるだろうが、それでも殆ど消耗なしの暁の相手は無理だ。いかに神剣使いといえど、無限にマナを生み出せるわけではないし、疲労しないわけでもないのだから。

故に、大量のミニオンを倒す為に少なからぬマナを消耗し、相応に疲労しているであろう斑鳩に勝ち目はないだろう。そこにダメ押しで、世刻という足枷までつけられた以上、原作通り暁の勝ちは動かない——俺はそう思っていた。

だが、俺はこの時、現実というものを甘く見ていた。現実とは、ほんの少しの差異、ちよつとしたことの積み重ねによって、劇的に変わってしまうのだということを、俺は理解していなかったのだ。

世刻に施した蘇る前世の記憶の方向性の調整や斑鳩の余力、それらは俺が思ってもいない方向に事態を動かしていたのだ。

第03話：誤算と異なる覚醒

世刻望にとって、暁絶は特別な人間であった。

お互いに認める大切な親友であり、忌憚なく何でも話せる頼りになる男、そのはずだった。少なくとも、つい昨日まではそうであったはずだ。

「世刻望……お前を……殺す」

だというのに、今やその親友は望に明確な殺気を浴びせ、殺害を宣言したのだ。

望からすれば、わけがわからない。悪い夢であったならとすら思う。

だが、これは現実だ。手にした神剣『黎明』の確かな重さと内から響く何者かの声がそれを認識させる。

(泣き)言を言っている場合か、タワケ！相手は、あのルツルジなのだぞ)

「な、なんで……」

そんな……イヤだ……俺はイヤだぞツ！」

それでも尚認められぬ現実に望は駄々を兼ねるように喚くが、絶は聞く耳を持たず、それどころか「この世界は間違っている」などという始末だ。挙句、最終的な結論は「苦しまないように殺す」である。なにも、状況は改善されていなかった。

「絶っ!!何で……何でだよ……」

あまりの理不尽に、わけのわからなさに望は我知らず涙を流していた。

「戸惑う気持ちもわからないでもない。正直なところ、俺も悩んだからな」

「だったらどうして、そんな剣を望ちゃんに向けるのっ?」

望同様に理解できないと希美が悲痛な声を上げるが、それですら絶には効果を及ぼさなかった。

「悩んだ末に、こういう結果を選んだ……」

いや、選ばざるを得なかったのさ」

絶に迷いはない。それどころか、言葉を発するごとにその覚悟を強固にしていくようであった。それでも、望は親友との殺し合いを受け容れられない。悪夢のような現実を認められず、悪い冗談はやめてくれと必死に叫ぶ。

「待ってくれ、俺を殺すって、そんな。絶っ!?!」

「……さあ、殺し合おう、望」

そんな望の心からの絶叫に、絶は極寒の殺意と冷たい刃で応じた。

絶が身構え、その目つきが鋭くなった瞬間、放たれたのは超高速の斬撃だった。

「うわあああああつ」「望ちゃんっ!?!」

望が絶叫しながらも、それに無我夢中で合わせられたのは偶然以外のなにものでもなかった。想い人の危機に希美の悲鳴があがるが、それを気にしていられる余裕は望にはない。

「……覚醒して間もないのに、この力か……」

そんな感心するような絶の言葉とは裏腹に、形勢は完全に決していた。

絶の剣閃に辛うじて合わせることはできたものの、いいように振られ、一方的に攻撃される結果となっていた。致命傷こそ受けていないが、すでに無数の傷を負っていた。望が生きているのは、偏に絶にすぐには殺す気がなく、別の狙いがあるからに過ぎない。

内なる声を見殺したせい、ミニオンと戦っていた時のような内から湧き出るような力が望にはないも痛手であった。戦闘技能もミニオン戦より明らかに劣化している。

それでも、絶と多少なりともやり合えたのは、大したものであったが……。

「だが、それもこれで終わりだ」

「待ちなさいっ、暁絶!!」

淡々と終焉を告げる絶と、迫る死に絶望しかけた望の間に、鋭い叫びと共に紅の戦乙女が光剣を携えて飛び込んでくる。

「斑鳩か……外の掃除は終わったようだな。それにしても、随分と早い」

その勇姿にも些かも怯みもせず、むしろ、愉しげに絶はそれを見つめる。

「おかげさまでね。がんばって掃除したわよ。

でも、その間あなたは何をやってるわけ？」

紅の戦乙女こと斑鳩沙月は、絶の行動について詰問するが、絶は取り合わない。

「お前には関係ないことだ」

「……っ!!ふざけないで。望くんは私が守るっ！」

自身の言葉を一顧だにせず切つて捨てた絶に、沙月は激昂する。

「そうか……ならば仕方ない。お前を殺そう」

だが、絶の返答は苛烈であった。次いで放たれたマナの奔流は、望と希美を後ずさりさせるだけの衝撃があった。そして一人踏みとどまった沙月は最早戦うしかないことを悟り、苦渋の表情を浮かべる。

「さあ、どいてもらおうか」

絶は言外に宣言する——どかなければ殺すと。

「くっ。望くんっ、いけるっ！」

「な、何とかっ……」

沙月は放たれたマナの奔流から、すでに絶が格上であることを悟っていた。

これは無理も無い。沙月の神剣『光輝』は第六位であり、絶の神剣『暁天』は第五位である。一位差とはいえ、そこにある格の差は決して小さいものではないのだから。

総合力No.1は沙月であるという久遠の評が間違っているわけではない。ただ、単純な戦闘力において、現状では絶が一人頭抜けているというだけなのだ。

故、望に共闘を求めたのは、勝つ為に当然の判断だった。

「次は二対一か。いいだろう、来いっ!!」

小動こゆるぎもせず、絶はそれを受け入れれる。

最早、ここに至れば彼には退路などないのだから当然だ。すでに輝ける日常を踏みにじってしまった以上、絶は本懐を遂げる以外ないのだから。

故に、敵が増えようが仔細はない。何者であろうと、立ち塞がるならば斬り捨てるのみ。

そうして、久遠の過去の行いにより、悲劇は起こる。

斑鳩沙月に原作以上の余裕があり、力を残していたが故に。

世刻望が原作よりも遥かにジルオルを受け容れ、戦闘能力を引き出していたが故に。

上記二つの理由により、暁絶は殺さない手加減をする余裕がなかったが故に。

見事に隙を突いたと望が思ったその隙は、絶の誘いであった。

そして、絶はその絶好の機会を見逃すほど愚かではなかった。

元より沙月と望は容易い相手ではないのだから。その失着につけ込むのは当然の判断であり、戦士としての本能だ。たとえ、絶本人にその気がなかったとしても、思っていた以上の苦戦が体を勝手に動かしてしまう。

返しの刃は完全なカウンターとなり、無情にも望を袈裟懸けに斬り裂いたのだった。

「!!……ッ!」

「望くん!」 「望ちゃん!」

袈裟懸けに斬られ、血を吹き出して倒れ伏す望の惨状に絶は歯噛みし、沙月と希美は悲鳴を上げた。

それを別の場所で見ている者がいた。神剣『千変』を介して、ライブ中継を受け取っていた久遠である。

「くそ、この展開は予想外だ!」

のんびり歩いていたのを瞬時に切り替え、疾風の如き勢いで久遠は走り出す。

「暁の真の目的は、ジルオルの力を用いてのエトルとエデガへの復讐のほず。間違っても殺しはしないと踏んでいたんだが……ッ!」

望や沙月が絶と戦う事になっても、久遠がのんびりしていられたのは、原作の展開を知っていたのもそうだが、その真意から考えて、現

時点では絶が望を殺すことはないと確信していたからだ。

だが、現実には思わぬ方向に転んだ。『千変』を介して目撃した望の傷は、明らかに致命傷だった。放っておけば、遠からず死ぬと確信できる重傷だった。思わぬ事態に、久遠は歯噛みする。

「世刻が『黎明』の力を完全に引き出していれば話は別だが、現状ではな……。斑鳩は青で、癒やしに長けているわけでもない上に、消耗も激しい。最も治癒に長けるはずの肝心の永峰は未だ覚醒していない始末。

本当に、どうしてこうなった!？」

神獣すらまともに扱えていない現状の望では、『黎明』の力を完全に引き出すなど、夢のまた夢だろう。

沙月は青属性の神剣使いであり、どちらかといえば攻撃特化のタイプで、回復や治癒は不得手だ。

希美こそが最も適任なのだが、そもそも覚醒していないのでは話にならない。

絶は明確に敵対した上に、傷をつけた張本人である。沙月や希美が近づくことを許さないだろう。

一目で致命傷と判断できる傷である。直ぐ様治癒しなければ、本気で命が危うい。出血も酷かったし、急がなければ失血死の可能性すらあるというのに、現実には全く優しくくない。

「ああ、くそ！間に合えよ！」

久遠はままならぬ現実と自身の目論見の甘さを呪いながら、現場へと急行する。

そして、彼はそこで奇跡を見た。

「望ちゃん！駄目、死んじゃ駄目！」

血を流して倒れ伏す望に、希美は涙を流しながら必死に縋り付く。

「暁絶！よくも、よくも望くんをッ！」

加害者である絶といえば、激高した沙月の遠慮のない猛攻を受け

て、手一杯の様子だ。心なしか、絶の動きが鈍いのも、沙月に押し込まれている原因だろう。

「……」

想い人からの返答はない。血の気を失い、青褪めていく表情と傷口から零れ落ちる熱い血潮が、まるで失われる望の命ように思えて必死に抑えるが、袈裟懸けに斬られた傷口の大きさは、希美一人にどうこうできるものではない。焼け石に水もいいところだ。

「——望ちゃんをこんなところで、絶対に死なせない！」

だが、それでも希美は諦めなかった。鈍くて優柔不断なところがあつた望だが、それでも彼女にとっては大切な幼馴染であり、唯一無二の想い人である。つい先日、野犬に襲われた時——残念ながら覚えていないが——自分を守ってくれたのは、望であると彼女は確信している。

なぜなら、幼少の頃同じようなことがあつた時、守ってくれたのは望だったのだから。

そして、同時に希美はその後のことも覚えている。どこからともなく剣を取り出し、野犬を殺した望を自分が首を絞めて殺そうとしたことも臍気ながら……。

希美は、自身と望が何か大きな流れの中にあるのを確信していた。しかし、あえて彼女はそれに気づかないふりをしてきた。幸せな日常が崩れてしまうのが恐ろしくて——そこで待つ望との絶対的な別離の運命を無意識に感じ取つて。

「絶対に!!望ちゃんを死なせたりしないっ!!」

だが、今はそれが必要だ。あの非日常を呼びこむ力が!

故に、希美に逡巡はなかった。そも彼女は、傍らにある力を認識していたのであるから。

明確な決意と覚悟のもとに、彼女は非日常への一步を踏み出す。

「望ちゃんを救える力を——今こそあるべき姿に還れ!!清浄!!」

求めれば、内より言葉は勝手に紡がれた。次の瞬間、希美の手には鎌と槍が一体化したような斧槍ハルバートの如き神剣が現れる。そして、放たれるは圧倒的な癒しの力。目撃した久遠をして、救世の女神である

フアイム・ナルスの権能そのものを具現化したような『奇跡』だったと評させた程だ。

「!?!」

「嘘!?!希美ちゃんもなの!」

激しく剣戟を交わしていた絶と沙月が、そのマナの奔流に瞠目し動きを止める。

その間も、『清浄』から放たれる圧倒的な癒しの力が望に注がれていく。見る見るうちに塞がっていく傷口に、血色の戻っていく望の表情。まるで、時間を逆戻ししたからのような光景であった。

それは覚醒済の神剣使いである二人をして、驚愕させるだけの凄まじい力の発現であった。

「永峰はまさか……役者は揃ったということか」

絶は、その光景を見て何かを悟ったのだろう。得心したように頷いた。

「暁絶、あなたは何を知って、何を企んでいるの?」

望の心配はもういらぬことに内心安堵しながら、沙月は意識を切り替えて、絶の真意を問い質す。

「何度も言わせるな。お前には関係ない」

「ここままでやっておいて、それが通ると思っっているの?」

絶の返答は変わらず、にべもない。

が、沙月とて、ここまでやられてそれで済ますはずもない。

両者の間に、再び一触即発の空気が流れる。

しかし、その空気を崩したのは、両者ともに埒外の人物であった。

「……!?!」

「——ツ!?!何のつもりだ、永峰?」希美ちゃん!?!」

自身の首を正確に刈り取る軌道で迫った『清浄』をすんでのところで絶は弾き、思わぬ襲撃者に沙月は驚愕する。

「——ああ……ああああああああああ!?!」

それに対する希美の返答は声ならぬ叫び声であった。というか、その目に意思の光は見られない。

にも関わらず、まるで肉体が勝手に動いているかのように、絶に対

して正確で鋭い攻撃を繰り出し続ける。

「覚醒の余波で、自意識を失っているのか……」

希美の攻撃を捌きながらも、絶は冷静に希美を観察していた。その目は実験動物を観察する研究者のようですらあった。

沙月は止めるべきか、自分も助成すべきか判断がつかないでいた。希美のおかげで望の傷が癒え、命の心配がなくなったせいで怒りが沈静化し、再び絶への同胞意識と共に冷静さと配慮が戻ってきていたからだ。

そうこうしている内に、空間が、校舎全体が——いや、世界が揺れた。

「世界が断絶してゆく……」。

この莫大な力……そうか……神獣が」

その揺れに何かを感じ取ったのか、絶は悟ったように呟く。

そして、未だ続く希美の攻撃をいなし、両手持ちの力づくの斬撃で無理矢理吹き飛ばす。

希美はその一撃を『清浄』で受け止めることには成功したものの、完全に体を浮かされて、吹き飛ばされる。

「希美ちゃん！」

沙月がすかさずフオローに入り、希美を中空で受け止めるが、勢いを殺しきれず諸共に吹き飛ばされ、絶に大きく距離をあげられる結果となった。

依然、倒れ伏したままの望を挟んで、両者は絶と対峙する。

「斑鳩、永峰、今回はここまでだ。……望の命は、お前らに預けよう」

「逃げる気？」

「さてな、あくまで殺し合いたいというのなら、俺は構わんぞ。

だが、現状のお前に勝ち目があるとは思えんがな」

「ッ！」

絶の鋭い指摘に、沙月は黙らざるをえない。己の消耗は激しく、先程まで猛攻を繰り出していた希美も自分の腕の中で、電池が切れたかのようにピクリとも動かない。望の方は言うまでもない。続けても不利なのは、沙月の方であった。

「理解した!?——何者だ!」

形勢の有利を確信しきつた絶が望の方へと一步踏み出した瞬間、突如として銀系の雨が絶に降り注ぐ。

不意打ち気味のそれをどうにか躲した絶は、険しい声で誰何する。

「悪いが暁、常のお前ならともかく、今のお前を気絶している世刻に近づくことは許可できんな」

「!!」

そんな言葉と共に現れたのは白衣に身を包んだ一人の男だった。銀系が繋がった手袋をしている所から見て、先の絶への攻撃をしたのは、間違いなくこの男だろう。

男は、絶にとつても、沙月にとつても見覚えのある男であり、それなりに馴染みのある人物だ。それだけに、両者は驚愕して絶句した。

「やれやれ、学園が大変なこの時に仲間割れしている場合じゃないだろうに。お前ら、一体何をしているんだ?」

心底呆れた様子で夜闇の中から姿を現したのは、糸目が特徴的な物部学園の養護教諭兼学校医である「永森久遠」だった。

セーフ!ギリギリセーフ!

本当に危ないところだったが、永峰が原作とは異なる覚醒をしたおかげで世刻は無事だ。

おかげで、俺が正体をバラさずに済んだのも大きい。神獣ものベーもちゃんと出てきたみたいだし、何よりだ。

なにせ、ここで世刻が死んでしまえば、全てが終わってしまうのだから。

暁を救うには、世刻というかジルオルの『浄戒』が必要だし、ナルカナの説得 or 契約にはジルオルの転生体である奴が必須である。斑鳩や永峰には必須というわけではないが、それぞれ弟分、想い人を目の前で殺されたことは大きな傷になる。下手しなくても戦力外になりかねない。

——本当に永峰はいい仕事をした。

そんなことをしみじみ思って傍観に徹していたのだが、どうにも風向きが怪しい。

永峰の奴、明らかに暴走してないか？

いや、神獣が暴走している時点でわかって然るべきだったのかもしれないが、暴走しているのにも関わらず、その処置は完璧だっただけに、案外本人は意識があるのではと油断していた。

暁へと放たれる永峰の攻撃は、全て急所狙いの正確無比な攻撃だ。

本来の永峰の精神性であれば、絶対に無理な攻撃——どう考えても神剣に振り回されているか、ファイムがやっているとしたか思えない。とはいえ、暁は見事に捌いている。

まあ、急所狙いで正確無比ということは、それだけ読み易いということでもあるから、無理も無い。

現状での両者の技量差及び肉体の差は、明白なのだから。

——さて、本当にどうしたものか？

俺はどうするべきか、本気で悩んでいた。すなわち、介入するか、傍観するかである。

現段階での正体バレは避けたいのが本音だが、ここまで原作と違ってきてしまうと、そうも言っていられない。

最早、原作は参考情報とするべきであり、確定した未来の情報と考えるのは危険だ。

で、あるならば、養護教諭兼学校医という立場に留まるよりは、積極的に行動指針の決定に関われる神剣使いになっておくべきだ。物部学園の統治体制の本質は、結局のところ、神剣使いの圧倒的な武力を背景とした恐怖政治なのだ。養護教諭兼学校医で数少ない大人ということ、発言権は与えられるだろうが、それでも神剣使い達の決定を覆す事はできないであろうから。

色々考えている内に、永峰が吹き飛ばされ、それを斑鳩がフオロ——する——が、どうやら、予想通り暁の方が上手であったようだ。見事に世刻を挟んで、距離をあけられてしまっている。斑鳩に受け止められたことで、永峰は動きを止めているし、度重なる連戦で斑鳩の消耗

は言うまでもない。どう足掻いても暁の勝だろう。

まあ、それはそれでいいんだが、位置関係が悪過ぎるわ！

一度、世刻を本気で殺しかけた以上、暁は世刻の安全面では欠片も信用出来ない。

ここでの「お前を殺す」発言はブラフであり、覚醒のための発破がけだと思っていたのだが、こうなれば本気であるとするほかない。少なくとも、死んでも構わないくらいの心構えであると考えるべきだ。

故、暁が世刻の方に足を踏み出した時、俺は迷いを捨てた。

「悪いが暁、常のお前ならともかく、今のお前を気絶している世刻に近づくことは許可できない」

俺は神剣使いとして舞台に上がり、時間樹エト・カ・リファと地位神剣第一位『叢雲』を巡る運命の物語に介入することを宣言したのだった。

断章：〈鞘〉の眷属達

物部学園の保健室。その主である永森久遠は、深い溜息をついていた。

「ハア、斑鳩は強引に寝かせたから、後でうるさいだろうな。暁が素直に退いてくれて助かった……」

視線の先にいるのは、ベッドに眠る三人の生徒達。全員が神剣使いで神の転生体という超弩級の厄ネタ持ちであり、希少種だ。

久遠の介入後、絶は自身が攻撃されたことをもって、久遠を明確な敵であると認識した。

未知の神剣使い、それも自身に気づかれること無く正体を隠蔽し、気づかせること無く自身を神剣の射程内におさめる技量の持ち主である。即座に形勢の不利を悟り迅速に退いてみせたのは、久遠からしても見事なものだった。流石に戦い慣れているということなのだろう。

むしろ、久遠として困ったのは、沙月の方だった。

中々に強烈な視線で睨み付けられ、詰め寄られたのだ。

絶のことと極限の疲労状態もあって、疑心暗鬼&余裕が無いと見た久遠は、神剣魔法を用いて沙月を強制的に眠らせた。一旦睡眠をとって時間をおけば、ゆだった頭もましになるだろうと判断したからだ。それに責任感の強い沙月のことだ。安全が確保されるまで、無理を押しでも起きていかねないという危惧もあった。

「さて、どこまで話すべきか……」

当然ながら、久遠としては全てを明かす気など毛頭ない。明かす義理もないし、そもそも話す意味もないからだ。

大体にして、前世の記憶云々はまだしも、自分達が創作物の登場人物であるなど、どうして信じ受け容れられようか。信じられないものを話す意味は無いし、久遠としても後者は絶対に語ってはならないことだと思っていた。

沙月や望達に教えてやれるのは、精々が自分が神剣使いであることと時間樹エト・カ・リファ外から来たということくらいだろう。当然

ながら、永遠者であることは勿論、〈鞘〉の眷属であることを、久遠は語るつもりはない。

神剣使いであることを明かした以上、戦列には加わるつもりではあるが、あまりに久遠に依存されても困るし、それでは望や希美の成長を阻害しかねないからだ。それに若い頃の苦労は買ってでもしろというし、あまりにも久遠が前面に出過ぎると、フォルロワあたりが出てこないとも限らないのだから。

故、久遠は表向きは第六位『千変』及び第四位『万化』の主として振る舞うつもりであった。

「四位という高位、それも二本の神剣に認められたということにしておけば、戦闘力の高さもある程度は誤魔化せるだろうしな。問題は、『神名』や『神獣』についてまで説明するかどうかだよな」

二本の神剣の主というのは、『旅団』であつても埒外の存在である。管理神サルバルの転生体であるサレスなら知っている可能性はゼロではないだろうが、どの道、己の力量を正確に測ることはできまいと久遠は考えていた。

それよりも問題なのは、『神名』や『神獣』の時間樹エト・カ・リファ特有のシステムについてだ。『神獣』については化身化させれば、容易に誤魔化せるだろうが、『神名』についてはどうしようもない。生憎と進んで枷を嵌められたとは思わなかったし、万が一の備えを考えれば力を制限されるのは勘弁して欲しいというのが偽らざる久遠の本音だ。

沙月をはじめとした『旅団』の面々は、神剣使いとは『神名』ありきであり、神の転生体であるという風に思い込んでいる節があるのだ。『神名』の有無を彼らが確認できるかどうかは知らないが、仮にできたとしたら、面倒なことになるであろうことは目に見えている。そうすると、『神名』の真実を話しておいた方がいいようにも思えてくるから難しい。

だが、世の中には知るべきでないこと、知らなくていいことと言うのは確かに存在する。

『神名』の真実はまさにそれで、まさか自分達が時間樹エト・カ・

リファに縛られた保守システムの一部であることなど、知らずに済めばそれにこしたことはない。なにせ、『神名』オリハルコンネームの真実を知ったエドガとエデガを絶望させ、創造神エト・カ・リファへの反逆を決意させた程なのだから。

「やはり、『神名』オリハルコンネームについてはなしだな。万が一にも突っ込まれたら、この時間樹外の存在であることを理由にすればいいか……」

『神獣』については、化身化させて誤魔化す方向でいく。『森羅』に頼みたいところだが嫌がるだろうしな。奥の手とでも言って、基本的に『森羅』は秘匿するか。

見せ札扱いで嫌かもしれないが、『万象』お前に頼もう」

その言葉に応じたように、『万化』に擬態している『万象』が光輝く。光が収まった後には、久遠の前に濡羽色の黒髪を腰まで伸ばした艶やかな漆黒の巫女服に身を包んだ少女が跪いていた。年の頃は15か16位にしか見えないのに、不思議なほどに蠱惑的で、艶めかしい色気を帯びた美少女であった。

「マスター、何なりとご命令を」

もつとも、その美貌とは裏腹に口調は実直そのものであったが。

「相変わらず、お前は堅苦しいな、朔夜」

己が相棒ともいふべき少女の言い様に、久遠は苦笑した。

「私はマスターの剣であり、下僕なのですから当然です。私は『森羅』とは違いますから」

少女の名は「朔夜」。番外位『万象』の化身である。

久遠が永遠者エターナルとなって以来の付き合いで、潜り込む為の身分偽装ではあるが夫婦を装ったことすらある。

「やれやれ、まだ気にしているのか？お前のせいではないと何度も言っただろうに」

「いえ、『万化』であった頃に当時の主を狂乱させて、妹君を殺したのは他ならぬ私自身です。それがあの似非聖女の仕込みであったとしても、その事実が変わりませんか」

これが『万象』の持つ傷だ。かつての主を狂乱させ、死なせた原因であり、現主の妹を殺したという罪。

それは朔夜にとって、絶対に許されることのない罪だ。主である久遠が許そうとも、それは変わらない。

なぜなら、何よりも朔夜自身が許せないのだから。

「あまり思い詰めるな。俺と六位の『千変』だって、『平静』とあいづがいなければ抗えなかつたんだ。当時、すでに四位であつたお前にかかつた強制力がどれ程のものか：「それでもです」：そうか」

朔夜はこのことについては、どうあつても譲る気はないようだ。常でない、久遠の言葉を遮るということすらしているのだから。

「それでご用命は、『神獣』として振る舞えということでもいいのでしょうか？」

「ああ、面倒をかけて悪いが、よろしく頼む」

「マスターの命とあらば、身命を賭して」

「だから、硬いつて……」

もつと気楽に——ハア、お前に何かあつたら困るんだから、そこは肝に銘じておけよ

「畏まりました」

ですが、この者達をはじめとした生徒達の安全がかかっている場合は、いかが致しますか？」

「——ユーフォリア以外であれば、お前自身を優先しろ」

久遠は僅かに逡巡を見せたが、最終的には断言した。

「よろしいのですか？」

それでも朔夜が問い返したのは、久遠が少なからず生徒達に情を移しているのを理解していたからだ。

「勿論、余裕があれば守ってやれ。だが、それはお前の身命に優先することはない。こう言つては悪いが、結局のところ赤の他人だからな」

久遠とて冷血漢というわけではないし、教師として生徒達を思う気持ちも相応にある。

しかし、だからと言つて五百年以上の付き合いがあり、これからも永遠とともにする相棒である朔夜に優先されるかと言われれば、久遠の答はNOだ。

極論を言えば、巻き込まれた生徒達は運が悪かったという他無し、神剣使い達はある意味自業自得なのだから。

「了解致しました」

朔夜も素直に引き下がる。別に彼女からすれば、生徒達がどうなるかと知ったことではないからだ。

そんな彼女があえて問い返したのは、偏に主の心情を慮つてのことだ。

というか、久遠と『森羅』以外のことなど、本当にどうでもいいのだ。誰が死のうが、世界が滅びようが構わない。一にも二にも、何よりも主である久遠こそが至上であり、優先される。久遠が命じるならば、〈鞘〉の眷属としての立場すら容易に捨てられてしまう。久遠が「白」といえば、「黒」であつても「白」とするのが、朔夜という少女の精神性であつた。

基本的にイエスマンであるから、そういう意味で『森羅』の方が色々都合がいいのだが、肝心の『森羅』は武器であることから逸脱する化身化を殊更嫌っている為、それもできない。久遠は内心で溜息をついた。

が、同時に、この少女が客観的視点という意味では、『森羅』よりも優れていることを思い出し、彼女なりの見解を聞いてみることにする。

「……話は変わるが、お前はなぜ『聖なるかな』とのズレが生じたのだと思う?」

「他の要素が変わっていないのなら、間違いなくマスターが原因かと思われれます」

「やはり、そうか。必要以上に関わり過ぎたか……」

己の招いた凶事に久遠は齒噛みする。そんなことをしても意味は無いと理解しても、後悔せずにはいられなかった。

「ですが、気にする必要はないかと」

しかし、忠実なる漆黒の巫女は共感を示さない。

「何だと、どういう意味だ?」

「マスターの言われる『聖なるかな』については、教授していただい

ておりますので、私共も存じております。ですが、『聖なるかな』は元よりマスターという強力無比な存在がいなかった場合の物語であり、それは今現在のマスターが存在する現実ではございませぬ。明確な差異が生じるのは当然かと存じます」

物語と現実、乖離するのは当然であると朔夜は断言する。

「俺が何もしなくても、差異は起こったというのか？」

「はい、マスター。私はそう判断します。」

世刻望をはじめとした斑鳩沙月等の神剣使い達、そして椿早苗を筆頭とした一般人達、いずれにせよ彼らはそれぞれの考えをもって、己が意思によって生きています。彼らはれっきとした現実に生きる人間であり、物語の中の決められた役割を演じる登場人物キャラクターではないのですから、差異があるのは当然でしょう。

むしろ、無い方が不自然かと愚考いたします」

それは当然のことで、言うまでもないことのはずであった。

久遠とて、転生して以来、五百年以上の時を経ているのだ。今生きる世界、そして、そこに生きる者達が作り物ではないことなど理解している。そうでなければ、身分偽装にここまで手間暇かけていないし、介入手段とてもっと強引になっていたであろうから。

「世刻望が死にかけたことや、永峰希美の覚醒の仕方が異なることなど、なるほど、マスターが危惧されることは理解できます。ですが、それは当然ではないでしょうか？」

私達も、テムオリンの筋書きシナリオから飛び出し、『聖威』の化身が押し付けようとした滅びの運命シナリオを覆したではありませんか。どちらも力関係だけを見れば、絶対に不可能な所業であったと言うのに」

「あれは運が良かった。〈鞘〉の眷属になれたのもそうだし、全面的にバックアップ受けられたのも……」

「いいえ、それだけではありません。」

『平静』を託した妹御の意志、かつての主の願いと想い、そして、あの時間樹に生ける全ての生物と時間樹自身の激情——そういった様々な要因が重なって、私達はここにいますのですから。

世刻望と永峰希美の件もそれと同じことです。様々な要因が積み

重なって、そうなったのです。確かに最大の原因がマスターにあることは否定できませんが、その全ての責任が己にあるなど傲慢以外の何ものでもありません。

そして、何よりこの現実が『聖なるかな』という物語と同じように進むと考える事こそ、最大の間違いではないのでしょうか」

「……傲慢か、確かにそうかも知れないな。強すぎる力を手に入れたせいで、ちよつと驕っていたようだ。現実が思うようにいかないなど、当然のことなのにな」

原作『聖なるかな』の登場人物であつた者達と現実に関わり過ぎたというのもあるのだろう。いつの間にか、『聖なるかな』通りに進むものだと勘違いしていた。参考にはなるだろうし、そこから得た情報が役に立たないというわけではない。

だが、すでに己という最大の差異が生じている以上、全てがそのシナリオ通りにいくなどありえないのだ。

久遠は改めて肝に銘じる。

自分は確かにこの世界に生きているのだと。この世界は現実であり、書割の舞台ではないということ。

結局、全知全能の神ならぬこの身には、その時々で最善であると思える行動をとるしかないのだと。

「知っているという事は必ずしもいいことではないんだな……」

結局、久遠は分かっているようで、本当の意味では分かっていたいなかったのだ。

なまじ『聖なるかな』を知っているせいで、それに行動等を縛られてしまっていることを久遠は認めざるをえなかった。あくまでも物語で絶対的な指針ではないというのに、あまりにも似通っているから、そのままであつたから錯覚してしまつたのだ。

——まるでそれが確定した未来であるかのように

「……無様だな」

万象を内包する漆黒の少女は何も語らず、ただ主に静かに寄り添う。

主こそ真とする彼女であるが、同時に誰よりも久遠に厳しく、優しい存在でもあるのだ。

「お前には、いつも助けられているな」

「いえ、全てはマスターの思し召しによるものですから。それに私では『森羅』のような役割は果たせませんので……」

「ふっ、当然だろう。お前が『森羅』の代わりにならないように、『森羅』もまたお前の代わりにはならないのだから」

どうにも自分を卑下し、内罰的な所のある少女に、心からの言葉を届ける。彼女には虚飾は不要であり、それこそが何よりの労いであると知っていたから。

「……ありがとうございます」

僅かに頬を染めて、消え入るような声で言う朔夜には、常にはない可愛らしさがあつた。

「ふふ、ようやく俺もお前に一本取れたかな？」

さて、俺も少し仮眠するから、その間の警戒を頼む。三時間経つか、誰か来たら起こしてくれ」

「畏まりました。安心してお休み下さい、マスター」

先の可愛らしさはどこへやら、たちまち謹厳実直な従者の顔に戻った朔夜に、久遠は再度苦笑して意識を手放したのだった。

第二章：剣の世界

第04話：神剣使い＋1会議 前編

世刻望が目覚めた時、まず目に入ったのは、見覚えのある天井だった。

物部学園の保健室、原因不明の悪夢による体調不良のせいでも、何度も世話になっている。普段授業を受ける教室と同等に、望にとっては馴染み深い部屋だ。

「望ちゃん、目が覚めたんだね?!良かったー……。」

体痛くない?どこも調子悪くない?」

「望くん、目が覚めたのね。先生は大丈夫と言っていたけど、心配したわ。」

正直、待ちかねたわ」

望が目を覚ましたことに気づいたのか、聞き慣れた声が耳に届き、同時に見慣れた顔が視界に映る。

片や、物心つく前からの付き合いである幼馴染みの永峰希美。心底心配そうにこちらを覗き込んでいる。此方、物部学園のアイドルにして、生徒会長である斑鳩沙月。こちらは、安堵と共に待ちわびたと言わんばかりの表情をしていた。

——そして、もう一人

「やれやれ、大丈夫だと言ったはずだがな。永峰も斑鳩も、少しは信用してほしいものだ」

どこか投げやりな諦めたような声。こちらも望は聞き覚えがあった。

希美や沙月に比べれば、親しみは下がるが、世話になったと言う意味では人一倍の人物。ここが保健室であることを考えれば、いて当然の人物。

「えへへ、ごめんなさい。でも、それだけ心配だったんです」

「悪いとは思いますが、今は先生をそこまで信用しきれません」

素直に謝る希美とは対照的に、不信感を滲ませた沙月。目覚めたば

かりの望には、沙月が件の人物にこんな態度をとるのが理解できない。彼が知る限りでは、生徒と教師という間柄とはいえ、両者の仲は決して悪いものではなかったのだから。

「はあ、斑鳩はあれだな。一度鏡を見るべきだな。お前も、人のこと言えた義理じゃないと思うんだがな」

「うっ、そ、それは……」

だが、どうやら上手なのは沙月の方ではなかったらしい。痛いところを突かれたといった表情で黙り込む。

「まあ、それはそれとして、世刻、無事に目が覚めたようで何よりだ」
今さながらに望にそう声をかけて、物部学園の保健室の主「永森久遠」は、その糸目が特徴的な顔で微笑んだのだった。

今現在、永遠神剣『清浄』の神獣ものべーの上にある物部学園、その生徒会室には重苦しい空気が漂っていた。室内にいるのは、永森久遠、椿早苗の二人の教師と、斑鳩沙月、永峰希美、世刻望の三人の生徒だ。

「これで先生が指定した全員が揃いました。先生の正体、今度こそ話してくださいませね？」

そう強い調子で久遠に迫るのは、重苦しい空気の元凶たる沙月だった。その顔には隠しきれない不信感が浮かんでいる。

「先輩、そんなに喧嘩腰にならなくても……」

常にならない沙月の態度に、宥めるように希美は言う。

「沙月先輩、落ち着いてください。俺が寝ている間に、一体何があつたんです？」

望も訳がわからないなりに言う。

だが、意外なところから、沙月の援軍が現れる。

「それは吾も疑問だな。永森久遠、汝は何者なのだ？」

望の肩に腰掛ける妖精を思わせる小人の少女。神剣『黎明』の神獣レームだった。

彼女の命名を発端とする神獣の名前で一悶着あったりしたが、今はいるのが当然のように望に侍っている。

「レーメ、お前まで、一体何を言い出すんだよ」

恩人に対する自身の神獣の言いように、望は眉をしかめる。

「ノゾム、これは必要なことなのだ。ノゾムは気づいていないだろうが、其奴は熟練の神剣使いだ。

ノゾムも覚えがあるだろう。ノゾムが悪夢で体調を崩した時、保健室で眠れば不思議と体調が改善したことを。それをなしていたのはこの男なのだ。この男は、ノゾムが眠っていることをいいことに『黎明』に干渉していたのだぞ」

「なっーレーメちゃん、それ本当!?!」!?!」

沙月も初耳の件であっただけに驚愕を露わにする。望もまさか、そんな種があるとは思わず、思わず久遠を凝視する。

「本当のことだ。吾はいついかなる時もノゾムと共にあったのだからな。

さあ、答えてもらおうか、永森久遠。一体、いかなる目的があつて、ノゾムに近づいた?」

重苦しい空気が一転して、緊迫した空気が空間を満たす。望や希美は気づいていないが、レーメはマナを高め、完全な臨戦態勢だ。沙月もそれとなく望や希美をかばうように、位置関係を変えていた。

「あー、緊張しているところ悪いが、目的なんぞないぞ。

そりゃ、この世界に来たのは、一定の目的があつたことは否定しないが、世刻達と関わったのは完全な偶然だぞ」

しかし、肝心の久遠は微妙な顔をして、頭を掻いただけだった。「嘘よ、そんな都合のいい偶然があるわけないでしょう?」

時間樹全体に影響をもたらしかねない破壊神の転生体がいる世界、それも同じ学校に神剣使いが都合良くいるなど考えられなかった。

というか、沙月自身、監視として『旅団』から送り込まれている身である。そんな偶然信じられるはずがなかった。

「まあ、お前はそう言うだろうと思つたわ。椿先生、頼めます?」

この事態を予想していたのだろう。久遠に動揺は見られない。

「……ええ、分かったわ。沙月ちゃん、落ち着いて聞いて欲しいの。永森先生の言葉に嘘はないわ。だって、永森先生が赴任したのは、望が入学する二年前だもの」

「えっ」「なるほどー」「あつ、そうか」

沙月は虚を突かれたかのように声を上げ、希美は納得の声を、望は少し遅れて気づく。

「これじゃあ、沙月ちゃんの言うように、望目当てて学園に来たというのは、無理があるでしょう？望が物部学園に進学するとは限らなかったんだし」

「どういうことなのだ？」

レームが一人訳がわからず、疑問の声を上げる。

「時系列的に考えて逆なんだよ。俺は世刻がいたからここに来たわけじゃない。むしろ、その逆で俺がいるところに世刻達が来たというだけだ。悪いが、斑鳩、俺はお前や暁とは違うぞ」

久遠は淡々と説明する。無論、真実は真逆なのだが、全知全能の神でもない限り、久遠の真意を知ること説明することも不可能である。伊達に前準備で十年以上かけたわけではないのだ。

「……ッ」

これには沙月も黙らざるをえない。物部学園に先にいたのは久遠の方で、自分も含めた望達神剣使いの方が後に来たのだ。どう考えても、因果的に望目当てとは考えられない。偶然という言い分が正しいということになる。

だが、それでも沙月には、どうにも納得し難いものがあつた。

「沙月ちゃん、気持ちはわからないわけでもないけど、本当に偶然なのよ。永森先生が医師免許を持っているのは知っているでしょう？あれを取得するには医大六年、研修に二年、最低八年かかるのよ」
そこに早苗のダメ押しの援護射撃が入る。

「あつ……」

今度こそ、沙月は納得せざるをえない。医師になるのは簡単ではない。膨大な時間を費やし難関を突破して、初めて医師と名乗れるのだということ。沙月も知っていたからだ。久遠が正規の医師資格を

持っているのは、一部では有名な話だし、彼女も把握していた。

「でも、先生、お医者さんにならないで、なんで養護教諭なんてやっているんです?」

そこに希美が純粹な疑問の声をあげる。

「ああ、それは簡単だ。あんまり、この世界に長居するつもりがなかったからだ」

「どういう意味ですか?」

「言ったらう。俺はこの世界に「来た」と。俺は本来この世界の者ではない。この世界には医者としての知識と技術を学びに来ただけに過ぎないんだよ。そして、医者というのはお前らが考えるよりも遙かに忙しく、重責な仕事だ。下手に患者をもったりしたら、年単位で拘束されかねんからな。患者を途中で放り出すような真似はしたくないのでな」

「それで養護教諭兼校医を?」

早苗はなんとも言い難い複雑な表情を浮かべた。

教職員の中で謎だったことが、まさかこんな形で明かされようとは思ってもみなかったに違いない。それもその理由が「異世界人」だからというのは、予想外にもほどがあるだろう。

「ああ、適度に患者を診られて、重篤な患者は応急処置くらいで丸投げできる立場ですから。まあ、養護教諭の資格をとるのに余計な時間がかかったので、本末転倒だったんですが……」

そう言っただけが悪そうに苦笑する久遠。この場にいる誰から見ても、そこに嘘はないように見えた。

「待て!まだ吾は納得していないぞ!それなら、なぜノゾムに近づいた?」

自分側だと思っていた沙月が陥落したのに慌てたのか、レーメが食ってかかる。

「いや、それは……」

困ったような表情で、久遠が言い淀む。

「どうした、言えないのか!やは……私がお願いしたのよ!……り、えっ!?!」

鬼の首を取ったように勢いづいたレーメだったが、一瞬で鎮火する羽目になった。

「望は両親をなくしているし、悪夢のことも聞いていたから、余計なことかとも思ったし、鼻屑になるんじゃないかとも悩んだわ。けど、折角医師資格を持つ永森先生がいるんだもの。頼らない手はないと思つて、私が気にかけてくれるよう、お願いしたのよ」

「早苗叔母さん……」

「早苗お姉ちゃん……」

「先生……」

望が、希美が、沙月が根底にある深い想いを察して、思わず声を漏らす。

そして、久遠が言い淀んだのも、早苗を慮つてのことだったのだと理解される。ここに形勢は決した。

「ううー、これでは吾が悪者みたいではないか！此奴が神剣に干渉していたのは事実だというのに！」

レーメが思わぬ展開に癩癩を起こして叫ぶ。

「いや、だって悪夢で体調不良になるレベルだったんだから、そりやどうかできるならどうにかするだろう？別に覚醒を促したわけでも、抑制したわけでもないぞ。世刻もそれで何か不具合があつたか？」

が、久遠はあっさりと言論で応じた。実際、彼は前世の記憶の方向性をいじっただけで、それ以上は何もしていないのだから。

「いえ、そんなことは全然ありません。むしろ、保健室で眠った後は、体調が良かったくらいです。そのせいで、頻繁にお世話になりましたけど……」

望の言い分を加味すれば、久遠に頼って近づいたのは望の方であり、久遠は偶々どうにかできる方法を知っていたので、それを施したに過ぎないことになる。これで必要以上の接近云々は邪推にも程があらう。

「ノ、ノゾム〜」

まさか主である望に裏切られるとは思わなかったのか、レーメは完

全に涙目だ。

まあ、別に望は裏切った気など毛頭なく、ただ事実を言っているだけなのだが……。

「ハア、レーメちゃん。諦めましょう。もう完全に私達の負けよ」

「うう、サツキく」

ひっしと沙月に縫り付くレーメを、久遠達は苦笑して見つめるのだった。

「さて、本題に入ろう。

さしあたっては、現状の正確な把握とこれからどうするべきかだ」
久遠が仕切り直すように言う。

「元の世界に戻るんじゃないんですか？」

「それができないから、困っているのよね……」

不思議そうに尋ねる望に、沙月が微妙な顔で呻く。

「沙月ちゃん、それはどういうこと？」

神剣使い以外の人間の代表かつ代弁者として、早苗が疑問を呈す。

「早苗先生、私や永森先生、後、ここにはいない暁くんも含めて、異世界の人間です。つまり、世界を渡る術があるということをまず理解して下さい。

そして、私達は今元いた世界とは、別の世界にいます。ここまではいいですか？」

「ええ、正直信じられないことばかりだけど、この目で見てしまっただけはどうしようもないわね。でも、異世界とはいうけど、どういうことかしら？地球の外は宇宙よね？その外側に別世界があるということかしら？」

早苗は半信半疑ながらも、自分なりに事態を咀嚼しているようだ。

「そうですね。理解としては間違っています。簡単に言うと、数多の世界を内包する一つの巨大な樹木があると思って下さい。その枝場の一つが、椿先生や世刻、長峰達がいた世界というわけです。

我々は、ちよつとしたトラブルで他の枝場へ飛ばされてしまったと考えて下さい」

久遠は分かり易いように言葉を選びながら、説明する。

「永森先生、詳しいですね……」

沙月が感心したように言うが、久遠からしてみれば何のことはないことである。

むしろ、カンニングしているようで座りが悪かったので、あっさり流す。

「当たり前だろう。そもそも俺は、この時間樹の出身ですらないんだからな。ある程度の下調べはしている」

「えっ、それってどういう?!」

聞き捨てならないことを聞いたと、沙月は問うが、久遠は取り合わない。今、重要なことはそこではないからだ。

「さて、数多の世界を内包する一つの巨大な樹木を『時間樹』と呼びます。そしてそこに属する枝葉の如き世界を『分枝世界』と呼びます。つまり、我々は、元いた分枝世界から、異なる分枝世界に飛ばされてしまったわけです。

分枝世界を渡るなど、本来不可能なことなのですが……」

「……不可能なことを可能にする力があつたってことですよね?」

久遠の言葉を引き取るように、希美が所在なさげに言う。

「そうだ。それこそが『永遠神剣』。斑鳩、永峰、世刻、お前達が持つ超常の力を持った武器だ。

特に永峰、お前の神獣ものべーは凄まじい力を持つ。学校内のインフラを維持し、時間樹内を自由に移動できるなど、正直聞いたこともない」

感心するように久遠は言ったが、正直なところ、依怙贖も大概にしろと言いたいのが本音だ。

実際、ものべーの万能性は異常だ。しかも、現状でも充分すぎるのにまだ成長の余地があるというのだから、恐れ入る。『相克』の神名を持つが故の優遇なのかと久遠が疑いたくなるのも、無理のない話であつた。

しかし、当の希美は少しも嬉しそうではない。それどころか、顔を曇らせる。

「でも、私のせいでのこの世界へ来ちゃったんですね？」

「それは違う」「それは違うわ！」

希美は自身のせいではないかと思っていたのだ。薄々ではあるが、彼女は自身の暴走に気づいていたのだ。

「永峰、よく聞け。お前のせいなんかでは絶対じゃない。そもそもの諸悪の根源はミニオンを送り込んできた馬鹿者共にある。それに思い出せ、夜でもないのに突如夜闇に包まれていただろう？あの時点で、すでにかなり不安定な状態だったんだ。そこにトドメの次元震ときた。これでどうにかならない方がおかしい。」

むしろ、お前は誇るべきだぞ、永峰。お前がいなければ、生徒達がバラバラに分枝世界に放り出される可能性すらあったんだからな」

「永森先生の言うとおりよ、希美ちゃん。あなたが悪いなんてことは、絶対じゃないんだから」

「は、はい」

久遠と沙月、両者に勢い込んで言われた希美は頷くほかない。

両者の言い分が正しいかなどと彼女には判断がつかないのは無理もない。それでも、二人が自分を思ってくれたこと、ただ、かばうためだけの気休めではないことは理解できたので、いくらか表情を戻したのだが。

「のぞみんも理解したみたいですから、永森先生、沙月ちゃんもそれくらいで」

早苗が助けに入る。が、内心で胸を撫で下ろしているのは彼女も同じだ。

なにせ、大切な妹分が槍玉にあげられるかの瀬戸際だったのだから。

「失礼、少し熱くなりました。では、本題に戻ります。今、問題なのは、我々をこの世界へと飛ばした次元震のせいで、元の世界の座標——場所が分からなくなっているということです。これでは元の世界への帰還は困難です。」

そして、もつと根本的な問題があります。永峰、そうだな？」
久遠に話を振られた希美がうなずく。

「根本的な問題？何なんだよ、希美」
聞き役に徹していた望が初めて、口を開く。

まあ、彼は目が覚めたばかりで、色々分かっていないというのもそうだが、この中では一番事情を理解していないのだから無理もないが……。

「うんとねえ、望ちゃん。先輩と先生から聞いたんだけど、ものべーは次元跳躍っていう分枝世界を移動できる力を持っているらしいんだけど、今はそれができないの」

「できない？なんでだよ？」

「それが分からないから困って「いや、そうでもない」……永森先生はこれが何か分かるんですか？」

「恐らくこれはプロテクトだ。それも外敵の侵入を防ぐためではなくて、内部の者が外部へと脱出するのを防ぐためのな」

「そんなものを一体何のために……」

「さあ、余程逃がしたくない相手がいるんじゃないか？」

まあ、とにかく俺達は、このプロテクトをどうにかしない限り、この世界から出ることができないというわけだ」

「そんな……」

置かれた状況の悪さに、早苗が言葉を失う。

「でも、そのプロテクトを張ってる奴をどうにかすればいいってことですよね？」

望は打開策を見つけたように言うが、次の久遠の言葉で凍りつく。

「まあ、その通りだが……世刻、お前にできるのか？張ってる相手は、十中八九神剣使いだぞ。それを排除すると言うことがどういふことか分からないわけではないだろう」

「……」

久遠は暗に殺すことができるのかと尋ねているのだ。望と希美は言葉を失う。

「どうした、そんなに顔を蒼くして。まさか自分で口にしておいて、

怖じ気づいたわけじゃあるまいな?」

「永森先生! そんな言い方は!」

久遠の余りの言い様に、沙月が食ってかかるが、久遠はにべもなかった。

「黙っている、斑鳩。」

お前にも分かっているはずだ。ここは何不自由なく暮らせた安全な日本ではない。それどころか、命はおろか食べ物にすら困るのが現状だ。分かるか?

しかも、そんな危機的状況にも関わらず、いつ再度の襲撃があつてもおかしくないんだぞ。ちよつとは、危機感を抱いてもらわないと困る。ましてや、お前達は神剣使いなんだ。現状を正確に認識してもらわねばならん。

酷なことを言うが、戦場での迷いは即座に死に繋がる。敵を殺せない腰抜けに用はないんだ。できないというなら、学園に閉じこもっている。正直、生命線である永峰には学園の保守に全力を尽くして欲しいしな。

調査も問題の解消も、俺と斑鳩だけでやる———とさえれば良かったんだがな」

教師としての本音を言えば、望も希美も戦わせたくはない。どちらも未だ成人していない子供なのだ。精神的に未熟だし、神剣使いとしても同様だ。神剣を使うのではなく、神剣に使われている現状では、素直に戦力としてかぞえられないのだ。

特に望は危うい。精神的に脆いし、暴走の危険も高いからだ。

希美は希美で、神獣もののベアの価値を考えたら、万が一があつては絶対に困るのだ。正直、神剣使いが少なかつた当初はともかく、旅団が勢揃いしてからも、希美を前線に出し続けていた原作は、何かおかしいと久遠は思う。

「……それができない事情があるってことですよね?」

斑鳩が結論を先回りして言う。

「そうだ。今まで起きたことから考えれば、俺達をこの状況に陥らせた敵の狙いは、世刻か、あるいは永峰も含むだろうからだ。戦えな

い敵の標的を護衛もつけずに拠点に残すなんてことは、どうぞ奪って下さいと言っているようなものだし、一般生徒にも累が及びかねんからな」

だが、現実には物語程、優しくない。『光をもたらす者』の目的は望だし、希美は希美で理想幹神を自称するエドガとエデガに狙われているのだから。この二人をものべー内、ひいては物部学園内に残すことはそこを狙って下さいと言っているようなものだ。そうなれば、少なからず一般生徒達も巻き込まれるだろう。それは教師として、大人として許容できない。

それならば、原作同様に両者を前線に出して、鍛えつつ守った方が安全面ではましと言う結論になってしまうのだった。

「望とのぞみんが？何かの間違いじゃないんですか？」

早苗が信じたくないと言う表情で問う。当の望と希美も否定してくれという懇願じみた視線が久遠にぶつけられる。が、現実には優しくなく、久遠もここで真実をぼかすような甘さはない。

「残念ながら、少なくとも世刻は確定ですね。別口みたいですが、暁がそうだったようですし、学園襲撃の目的は、世刻の神剣使いとしての覚醒だったのは間違いないですね。思うに、本来の目的は覚醒した世刻の力を何かに利用したいのだと思いますよ。まあ、十中八九ろくでもないことでしょう」

久遠はほぼ完璧に事情を把握してはいるが、それを明かすつもりは毛頭ない。

故に、あくまで推測として述べる。

「そんな……」

望は俯く。学園襲撃が、ひいては今のこの状況を作った原因が自分だと断定されたのだ。言葉もないとはこのことだった。

「望君のせいじゃないわ！永森先生も言い方を考えて下さい！」

「言い方を変えようが、事実は事実だ。現実が変わらん」

沙月が望を庇い、久遠に食ってかかるが、久遠はどこ吹く風だった。確かに久遠の言い分は正しいのだ。それは沙月も認めざるをえない。

「ノゾム……」「望ちゃん……」「望……」

レーメ、そして、希美と早苗が慮るように声をかけるが、今の望にはそれを気にかける余裕はなかった。

「俺はどうしたら……」

「お前にできることなどない。というか、勘違いするなよ？お前が原因と言うだけで、こうなったのはお前が悪いわけじゃないからな。むしろ、お前だって被害者だ。気に病む必要はない。俺が言いたいのは、お前自身が狙われているということだ」

「「えっ!?!」」

「なんだ、その反応は？俺が世刻を責め立てる為にこんなことを言っていると思っていたのか？だとしたら、とんだ心得違いというものだ。俺は世刻に自信が標的であると言うことを認識させたかっただけだ。」

そして何よりも、嫌でも戦ってもらわねばならんということをな」
沙月、希美、早苗、レーメのあんまりな反応に、久遠は内心で黄昏れる。

己は、どれだけ血も涙もない男だとおもわれているのかと……。

「俺が……戦う?」

望が忘我したかのように、声を漏らす。どうにも現実感がないようであった。

「そうだ、お前がミニオンを斬り殺したように、物部学園を、生徒達を、斑鳩や永峰を、そして何よりもお前自身を守る為に、剣をとって戦え。幸いにも、お前には力がある。永遠神剣という絶大な力がな」
ならば、これが現実であると知らしめんと、久遠は容赦なく望自身の所行を語り、明確に現実であることを想起させる。再び、周囲から責めるような視線が突き刺さるが、無視する。

なぜなら、絶対に必要なことだと、久遠は考えていたからだ。

「あのー、先生も神剣使いなんですよ？どんな神剣なんですか?」
蔓延する重苦しい空気に耐えかねたのか、空気を変えるように希美がふとそんなことを言った。

「あつ、そういえば……」

「先生も神剣使いなんですよね？」
「……」

沙月はすっかり追求を忘れていたという感じで、望は今更ながらにそうであったことに気づいて、早苗は言葉には出さなかったが、興味ありますと言わんばかりの表情であった。

「ハア、お前ら、普通は自分の神剣のことなんて、他者に明かしたりしないからな。覚えておけよ」

「「ハイ」」

「やれやれ、本当に分かっているのやら……まあ、いい。

今回は特別だ。事情が事情だし、今更、力を隠す意味もないしな。

『千変』『万化』

久遠の言葉と共に現れたのは、一対の手袋と丸まった糸の塊だった。

「これが先生の神剣、手袋とこっちは……糸ですか？」

「神剣って言っても、俺や沙月先輩の剣みたいに分かり易い武器じゃないんだな」

「むむむ、これが此奴の！」

「へー、これがその永遠神剣なのね」

机に置かれたそれを、言い出しっぺだけに希美が目を輝かせて見入り、望が自身や沙月のものとの違いについて漏らし、レーメが親の仇を見るかのように睨み付け、早苗が感心したかのようにしげしげと見やる。

「糸は、あの時暁くんを止めたやつよね。じゃあ、こっちの手袋は……まさか！」

しかし、沙月だけは違った。彼女はとんでもない可能性に気づいたのだ。彼女の常識からすれば、ありえないと言っただけに、驚愕を隠せない。

「先輩、変わっているのは分かりますけど、そこまで驚かなくてもいいんじゃないですか？」

「そうじゃない、そうじゃないのよ、希美ちゃん。私が驚いているのはね、先生が神剣を二本持っているということなのよ。……永森先

生、この糸と手袋は、それぞれ別の神剣ですよね？」

「そうだ、糸の方が六位『千変』、手袋の方が四位『万化』という」

「やっぱり……！」

「な、なんだそれは！アリエン！ありえんぞ！」

驚愕と警戒を等量に混ぜ込んだ視線で、久遠を見やる沙月。対してレーメは絶対にありえないことだと喚いて、混乱の極みにあった。望の『黎明』のような二剣一对の神剣も珍しいが、それ以上に複数の神剣を持つというのは稀なのだ。レーメが混乱して絶叫するのも、無理もない話だった。

「そんなに驚くことなのかしら？確かに複数の神剣を持っているというのは凄いだらうけど……」

永遠神剣の使い手ではなく、予備知識すらない早苗からすれば、二人の劇的な反応は理解できなかった。

「早苗先生、永遠神剣というのは、その名の通り神様の武器なんです。私や暁くんはもちろん、望くんや希美ちゃんも神の転生体であるからこそ、それを扱えるんです。そんなものを複数なんて」

「そうだ、複数の神剣に認められるなど、ありえることではない」

「さてな、できたんだから、仕方あるまい」

沙月とレーメが口々に言うが、久遠は知ったことではない。そもそもこの男、余程のことがない限り、これ以上自分のことは話さないと決めているのだから。糠に釘、暖簾に腕押しである。

「まあまあ、先輩もレーメちゃんも落ち着いて。先生、神獣はどんなのなんですか？」

希美は、なんとなくこれ以上言っても無駄であることを悟ったのか、今度は神獣について尋ねた。

「神獣って、レーメちゃんや、学校を運んでいるって言う、のぞみんの鯨みたいなの？」

早苗も同調する。もつとも、こちらは単純に興味からのようであったが。

「永峰、お前意外にガンガン来るなあ。お前の印象が変わりそうだぞ。」

そうだな……流石に両方は見せれんが、一方くらいは見せておくか。朔夜！」

久遠はどこか呆れたように言うと、誰かの名を呼んだ。

瞬間、手袋が発光し、光が収まった頃には、妖艶という言葉が相応しい漆黒の巫女が跪いていた。

「マスター、御用命を」

「ほわー」「ふえー」「綺麗な子ねー」

その美貌と醸し出される色気にレーメ以外の女性陣が、感嘆の声を上げる。

「な、なっ!?!」「……ゴクリ」

レーメは嫉妬と驚愕を織り交ぜた表情を浮かべ、望は思わず息をのむ。それ程の美貌と色気であった。

「紹介しておこう。四位『万化』の神獣である朔夜だ」

「マスターの下僕、朔夜にございます。皆様方、以後お見知りおきを」

丁寧な物腰で、頭を下げる。

美しい濡羽色の長い髪が清流の如く流れるその様は、類い希なる容姿も相まって、同性であっても目を奪われる。

「よ、よろしくね」

「よろしく願います」

「よろしく願いますわ」

上から沙月、希美、早苗の反応である。

それぞれ、微妙に狼狽え、元気よく、もうなんでもありねと半ば諦観してという具合であった。

そして、久遠以外で唯一の男性である望だが――

「……」

完全に目を奪われて、言葉を失っていた。

「こ、こらノゾム！何を惚けておるか！」

主の不甲斐無い姿に、レーメが怒りの声を上げて、頬を抓った。

「イテ、イテテテ。……ああ、うん。よ、よろしくな」

そこでようやく我に返ったのか、慌ててそんな風に言うのが望には

精一杯だった。

「望くんも男の子よね……」

「むこう」

「望ったら……」

そんな望むの反応は、当然、女性陣の不興を買った。

沙月と早苗は、呆れと仕方ないと言った風であったが、希美は明らかに機嫌が悪くなっていた。

「戻れ朔夜。ぐ苦勞だった」

「はっ、失礼いたします」

その不穏な空気を感じ取ったのか、久遠は即座に朔夜に化身化を解かせた。

こんなことで不和を引き起こしたら、目も当てられないからだ。

「あつ、ちよつと話してみたかったですね」

「そうね、同感だわ」

沙月と早苗が残念そうに言うが、久遠は黙って視線を希美とレーメに詰め寄られている望に向けた。

「望ちゃん、ああいう娘が好みなの？」

「ノゾム、吾という者がありながら、他者の神獣に目を奪われるとは、恥を知れ！この浮気者めが！」

「いや、あのな……」

望はたじたじであった。そして、その様子が、何よりも久遠が朔夜を引つ込めた理由を雄弁に語っていた。

沙月と早苗は顔を見合わせて、苦笑した。

「ま、まあ、それはそれとして、『千変』の方は見せてもらえないんですか？」

沙月が仕切り直すかのように尋ねる。

『千変』は気むずかしい奴だな。余り他者に姿を見せたがらんだ。まあ、朔夜と同じく人型であるだけでは言うっておこう」

「へー、そうなんですかー。そういう神獣もいるんですねー」「レーメみたいに出たがりじゃないわけか」

「……」

希美と望はのんきに頷いて聞いていたが、対照的に沙月とレーメは少なからぬ警戒を滲ませる。

久遠は、全ての手の内を明かす気はないと言っているのも同然なのだから、当然であろう。

まして、久遠の神剣は四位と六位である。神剣二本というだけで充分すぎる程脅威だというのに、神剣の位階すら最も高いのだから。

「やれやれ、そんなに警戒するな。お前達がこの学園の生徒である限りは、俺の守るべき対象だからな」

久遠は両者の内心を察したのか、そんなことを言った。

「今は信じておきます」

それに沙月は絞り出すように答えるのだった。

第05話：神劍使い＋1会議 後編

「さて、各々、正確な現状認識ができたことだろう。そこで一つ決めなくてはならないことがある」

——まあ、本当の意味では、欠片もできていないだろうが……。

「決めなくてはならないこと？」

「なんですか？」

内心をおくびにも出さず発せられた久遠の言葉に、望と希美が首をひねる。

「それはな、リーダーだ。これからの異世界生活を考えると、頭となる者は絶対に必要だからな」

「でも、それって……」「だよな」「……」

久遠はそう断言するが、希美、望、沙月からすれば、そんなものは改めて決めるようなものに思えなかった。三人の視線は、唯一の成人男性である久遠に、自然と集中する。そんな中、ただ一人、早苗が何かを深く考え込んでいた。

「ああ、言っておくが、俺はやらないぞ。というか、決めるもくそも実質一人しか適任者はいないんだが……」

久遠は痛いほどの視線を受けても、何の感慨もなくあっさりとは否定した。

それどころか、意味ありげに沙月を見やる。

「……そうなっちゃいますよね。沙月ちゃん、貴女がリーダーよ」

深いため息をついて、早苗も賛同の意を示した。

「えっ、わ、私ですか？永森先生か、早苗先生がやられるべきじゃないんですか？」

沙月からすれば、それは不意打ち以外の何ものでもなかった。

久遠がリーダーになつて、いい様に動かされることを警戒していたというのに、蓋を開けてみれば、なぜか自分がリーダーに推されているのだから、無理もないだろう。

「俺達では駄目だ。」

まず、俺は基本的に生徒達が関わりが薄い。生徒達に連帯感を抱か

せるのは難しいだろう。

そして、椿先生の方は……」

久遠としては、自由に動き回る立場を確保したかった。思うように動けないリーダー役など、絶対にごめんであった。

無論、やってやれないというわけではないが、言っていることも嘘ではなく、向いてないのも厳然たる事実だ。

「私は私で、望やのぞみんとの関係が深過ぎるの。担任ももっているし、本当の意味で平等に接するのは難しいわ。それに周りも私が公平だとは見ないでしょうからね。……そういうことですよね？」

そう、早苗も早苗で問題がある。彼女は生徒達との関係は良好だが、逆に望達に近過ぎるのだ。担任ももっているし、本人も言っているように、完全な平等というのは難しいものだ。無意識の内に、受け持っている生徒とそれ以外に対する態度に差が出ないとも限らないからだ。

久遠、あるいは早苗のどちらかが、学年主任とか、校長・教頭であれば、問題なく頭をはれたであろうが、養護教諭兼校医と担任をもつた現国教師という立場は、凄まじく微妙であった。

成人した大人であるというだけでは、リーダー役を務めるのは弱い。平時ならともかく、今は非常時であり、年功序列など何の役にも立たないのだから。

「そんな……早苗先生はそんな人じゃ！」

「沙月ちゃん、ありがとう。でもね、今重要なのは他の生徒達からどう見えるかだから」

思わぬ言葉に沙月が否定するが、当の早苗は落ち着いていた。別に卑下している訳ではない。客観的にどう見えるか、そういう話なのだ。

ちなみに久遠の方にフォローがなかったのは、沙月が未だ久遠を信じ切れていないからだろう。彼女にとって、久遠はとりあえず敵ではないというだけで、信用できる味方とは言い難かったのだ。

「でも、それでなんで先輩になるんですか？」

目は口ほどにものを言う。希美の不満げな眼差しは、言外に「望

「ちゃんは？」と言っていた。自分はともかく、思い人である望が一顧だにされなかったのは、正直、面白くなかったのだ。

「世刻や永峰は言うまでもないだろう。きついことを言うようだが、お前は自分や世刻がリーダーに向いていると本気で思っているのか？」

「そ、それは……でもっ！」

希美はそれでも食い下がろうとするが、久遠はにべもない。

「それでも納得できないなら、はっきり言っただろう。」

まず、第一にお前達は最上級生ではない。年功序列は役立たないと言っただが、生徒間では別だ。はっきりとした上下差が想定以上の反発を生むだろう」

「そうね、上級生は納得しないでしょうね」

久遠の言葉に早苗が首肯する。

「次に、お前達には一般生徒達の上に立つ資格をもっていなければ、その経験もない。言っておくが、これは神剣使いであるということ以外でだ」

「えっ？神剣使いということだけじゃ駄目なんですか？」

それこそがリーダーの資格であると思っただけに、希美は驚く。

「永峰、お前は無理矢理力で押さえつけられて嬉しいか？よしんばうまくいったとしても、それは短期的なものに過ぎない。遠からず崩壊する。恐怖政治とはそういうものだ」

「恐怖政治って、流石に言い過ぎじゃ」

望がたまらず口を出す。あんまりな言い様だと思ったからだ。

「神剣の力を背景に統治するならば、それは恐怖政治そのものだろう？言い方を変えたところで、実態は変わらんよ」

「……」

久遠の率直な物言いに、希美も望も黙らざるをえない。久遠の言葉には、まるでそれを実際に見てきたかのような重みがあったからだ。

「まあまあ、のぞみんだって、本気で言っただけじゃないでしょうから、それくらいにしてあげて下さい」

重苦しい空気が、再びたちこめるところだったが、早苗が取りなして、それを阻止する。

「……それで、神剣使いと言うこと以外で、皆の上に立てる資格を保持している私にということですか？」

思案顔で聞き役に徹していた沙月が口を開く。その表情には、どこか諦観が浮かんでいた。

「そうだ。お前には悪いとは思うが、実際問題、生徒達自身が選んだ生徒会長という肩書きを持つお前以上の適任者は存在しない。そして、何よりもこの事態については、誰よりもお前が詳しそうだしな」
「大人として、教師として、情けないことこの上ないけど、沙月ちゃんがりーダーになってもらうのが、一番うまくいくと思うの」

久遠は平然と、早苗は心底申し訳なさそうな顔で、結論を述べた。

——沙月がりーダーをやるのが最善であると

「……ッー」

沙月は自身の双肩にかかる重みに愕然とする。いつのまにか、自身の命だけでなく、一般生徒達の命まで背負わされることになっていたのだから、無理もないだろう。

沙月は、望達に比べれば熟達した神剣使いであると言えるが、精神的には思いの外幼い。望との距離感を間違えていたり、希美の真意をはかり損ねていたりするのがいい例だ。

「安心しろ。お前にリーダー役を押しつけるだけで、終わるつもりはない。俺が後ろ盾になってやるから好きにやってみろ。責任は俺がとってやる」

「そこは私達と言うべきですよ、永森先生。」

肩の力を抜きなさい、沙月ちゃん。責任は大人である私達がとるわ。リーダーだからと言って、貴女が全てを背負う必要なんてないの。私と永森先生と一緒に背負うし、貴女を支えるわ」

「永森先生、早苗先生……」

久遠と早苗が、なんでもないことのように、当然のように言う。

思ってもいなかった二人の言葉に、沙月は肩が少し軽くなったように感じられた。

「それに、望やのぞみんだって力になってくれるわよ、ね？」

早苗の言葉に、「当たり前だ」と望は力強く応え、希美は「もちろん！」と元気よく応えた。

「望くん、希美ちゃん……分かりました。どこまでやれるか分かりませんが、リーダー役やらせてもらいます！」

久遠や早苗のおかげで背負う荷は幾分か軽くなったが、それでも沙月にかかる重圧と責任は凄まじい。

だが、この頼もしくも優しい仲間達がいるのなら、何とかやっつけているかもしれないと沙月は思うのだった。

「斑鳩、見事だったぞ」

「ええ、とてもいい演説だったわ」

「本当に凄かったです」

「先輩、かっこよかったです！」

「うむ、サツキ、本当に大したものだ」

上から、久遠、早苗、望、希美、おまけにレーム。全員が沙月を心から賞賛していた。

学園内に取り残された全生徒を体育館に集めて行われた、現状とこれからの方針についての説明会。

そこで、生徒会長として、壇上に上がった沙月は、そのカリスマと真摯な態度で、見事一般生徒達をまとめあげる演説をやったのけたのだ。久遠と早苗のサポートがあったとはいえ、この右も左も分からない状況下で、一般生徒達を一時的にとはいえ安心させ、元の世界への帰還に全力を尽くすことに団結させたのは見事というほかない。

「もう、先生達まで大袈裟ですよ！私はただ、思っていることを言うただけで……」

手放しの賞賛を受けた沙月が、居心地悪そうに言うが、他の誰で

あっても、こうはうまくいかなかったであろうことは間違いない。沙月の手腕は素直に賞賛されるべきであった。

久遠や早苗がにらんだとおり、沙月にはリーダーとしての資質がある。

「謙遜の必要はない。お前が生徒達のことを命がけで守り、元の世界に皆を帰らせてあげたいという真摯な想いがあったからこそ、皆納得し、お前に従うことを選んだんだ。素直に誇っている」

「そうよ、沙月ちゃん。貴女は凄いことをしたのよ。私や永森先生では、こうはいかなかったでしょうね」

沙月とミニオンの戦いは、少なからぬ一般生徒達が目撃している。その実績と、「斑鳩沙月」として、生徒会長として、これまでの学校生活で積み重ねてきた信用があったからこそ、彼女をリーダーとすることを生徒達はよしとしたのだ。

「そうですよ。貫禄あって驚きました。本当に格好良かったです」
「先生達や希美の言う通りです。信介や阿川だって、言ってたじゃないですか」「あれがカリスマというやつなのだな」

希美が興奮冷めやらぬと言う体で、繰り返すように言えば、望とレーメもそれに続く。それくらい、沙月の演説は大したものだったのだ。

「もう、望くん達まで……。はいはい、分かりました。今は素直に受け取っておくわ。」

で、先生、なんで阿川さん達の申し出を断ったんですか？」

それはあからさまな話題転換だったが、久遠はあえてそれののってやることにした。

実際問題、それは避けては通れぬ問題なのだから。

「確かに現地調査と食糧問題はすぐにも解決しなければならぬ問題だ。そういう意味では、森や阿川が自主的に申し出てくれたのありがたい。だがな、最初から身内だけというのは、いらん不信感を与えかねん」

「身内って、信介と阿川は……森はお前の親友で、阿川は永峰の親友だ。かつクラスメイトで、椿先生の受け持つ生徒。どうだ？これで身

内じゃないといえるか？」…」

望の言葉を、久遠は即座に切って捨てる。

自分達がどう思うかではない。他の生徒達からどう見えるかが重要なのだ。

「そうですね、確かに望達だけで固めるのは問題でしょうね。少なくとも、各学年から一人ずつ、私達とは関係の薄い人生徒を入れるべきね」

「え、でも……」

希美は不安げな顔をする。信介や美里であれば、気心も知れていて気兼ねなく動けるといふ部分も大きいからだ。何より、彼女は自分達神剣使いに向けられる視線に混じる恐怖を敏感に感じ取っていた。

「……言いたいことは分からんでもない。だが、これは必要なことだ。何もしないというのは、思いの外ストレスがたまるものだからな。働かざる者食うべからずとはいわんが、生徒達にも何かをやらせる方がいい。」

だから、まずは全生徒に募集をかける。但し自薦のみ、他薦は認めない

——人は動いてない時ほど、いらぬことを考えるものだからな。

久遠はあえてそれを言わない。

暴動の可能性など、今の沙月達には荷が重すぎる現実だからだ。後で早苗とだけ、秘密裏に話し合うべきだと判断していた。

「でも、危険じゃないんですか？」

先のミニオンの襲撃が頭に過ぎったのか、望が不安げに言う。

「そうね、私達ではどうしようもないもの……」

「うむ、どうにもならんな」

早苗が心苦しい表情で同意し、レーメも頷く。

「確かに神剣使いでなければ、ミニオンの相手は基本的に無理です。もちろん、護衛の人員は割きますよ。」

——斑鳩、お前ならどう分ける？」

「……そうですね。人数は10名以内、護衛の人員は、二人から三

人。先生のどちらかには、学校に残って頂きたいと思います」

「それじゃあ、私が残るわ。情けない話だけど、サバイバルでは私は無力なもの」

「いえ、椿先生には重要な役割がありますから、卑下することないですよ。」

とりあえず、護衛には俺が行きましょう。後は……そうだな。世刻、永峰に来てもらおうか。斑鳩、お前は残れ。理由は言うまでもないな?」

「はい、大丈夫です」

沙月も反論しない。トップが軽々に動くことなどあつてはならないし、生徒達の抑え役としては己が一番適任であることを理解していたからだ。

「えーと、私や望ちゃんには……悪いが拒否権はない」……えっ!」

希美が控えめに、自分達の行動が勝手に決められたのに口を挟むが、久遠はにべもない。

「どういうことですか?」「ッ!」

その一顧だにしない態度に反感を覚えたのか、望がその意を問います。レーメは敵意剥き出しで久遠を睨んでいる。

「いや、だってお前達二人は、覚醒したばかりで素人同然だろうが。神剣を使うのではなく、神剣に使われている現状では、戦力として不安があるんだ。少しでも経験を積ませようとするのは、当然だろう?」

「あうっ」「うっ」「うぐっ」

取り付く島もない正論に、二人+おまけはうめき声を上げる。

実際、使っているのではなく、使われているという自覚はあるだけに、ぐうの音も出ない。レーメとて、望が一人前とは到底言い難いことを誰よりも理解していたのだから。

「それに世刻、一般生徒の安全を考えれば、お前は外に出られる時は外に出た方がいいいな」

「!?!」

「永森先生!」「永森先生、そんな言い方!」「き、貴様!」

久遠の非情な言葉に、望と希美が絶句し、早苗が怒りを露わにし、沙月とレーメも食ってかかる。

だが、久遠は微動だにせず、表情に欠片の変化もない。

「先の現状認識は何の為にやったと思ってる？ 事実を事実として認めずして、未来はない。まして、今はこんな状況だ。世刻と親しいお前達が反感を覚えるのは分からんでもないが、俺にとっては一般生徒と世刻の命は等価だ。小を犠牲にして大を守れるならそうすべきだろう？」

「……」

早苗と沙月は黙らざるをえない。自分達がいかに望側に立っているかを理解したからだ。

そう、客観的に見れば、久遠の言い分は正しいのだ。望を狙う敵の攻撃に、一般生徒が巻き込まれることなど、本来あつてはならないのだから。

「だが、勘違いするなよ、世刻。俺はお前を犠牲にして助かろうなんざ、これっぽっちも思っていないんだからな」

「へっ？」

「ど、どういうことなんですか!？」

思いもしない久遠の言葉に、望が間抜けな声をあげる。希美が混乱しながら、真意を尋ねる。

「俺が何の為にについていくと思ってる？ そうさせない為だろうが。安心しろ、俺はこの場の誰よりも強い。凡百の神剣使いなど返り討ちにしてやるさ」

あつげらんかんとそう言い放つ久遠に、沙月と早苗は悟る——この男、そうとうに意地が悪いと。

「なーんだ、脅かさないで下さいよー!」

希美がそう言うて胸を撫で下ろすが、直後に凍り付くことになる。

「別に脅しじゃない。覚えておけ。俺の優先順位は永峰、斑鳩、椿先生の順で、後は世刻以下同列だ」

居住とインフラを保ち、帰る為に絶対に必要なものべーのことがあるから一番が希美、リーダーかつ神剣使いとしての戦力価値から沙月

が二番、貴重な大人であり教職という地位にある早苗が三番。そして、標的である分と暴走の危険性を鑑みて、望は一般生徒達と同列という評価になると、久遠は淡々と説明した。

それは確かに納得のいく説明だったが、望と浅からぬ交友関係を持つ彼女達にとっては、到底受け容れられるものではなかった。

「そ、そんなの！」

「正しいのかもしれませんが、私は納得できません！」

「……ッ！」

自身の低評価に呆然とする当の望を尻目に、希美と沙月が猛然と食ってかかる。唯一、早苗だけが何かをこらえるように、唇を噛みしめる。

「お前達がどう思うが関係ない。俺はこういう優先順位で動く、頭に入れておけ。そして、可能ならば、お前達も決めておけ。その時になったら、迷いなく動けるようになる」

話は終わりだと久遠は席を立つ。

「現地調査と食糧採取は、俺の方で周知しておいてやる。お前達は少し考えておけ。お前達は少し——いや、かなり考えが甘いからな」久遠はそう言って、生徒会室を出て行く。誰もそれを止められる者はいなかった。

「ううー、あんな言い方しなくてもいいじゃない！そう、思いますよね、先輩」

久遠が退出してしばし後、爆発したのは優先順位一位とされた希美だった。

まあ、思い人が十把一絡げにされた挙げ句、ズタボロな評価をされたのだから、無理もないだろう。

「まったく腹が立つ！あやつは何様なのだ！」

話を振られたわけでもないのに、レーメが同調する。余程腹に据え

かねたのだろう。

「……でも、正しいわ」

それを断ち切るようにはつきり言ったのは、意外なことに早苗だった。

「サナエ、何を言う!?!」「早苗お姉ちゃん!?!」

信じられないと言う表情で、レーメと希美が視線を向ける。

「のぞみんもレーメちゃんも落ち着いて。怒る気持ちは分かるけど、教師として正しいのは永森先生の方なのよ。ハア……本当にリーダー役を沙月ちゃんに任せて良かったわ。とてもじゃないけど、公正公平になんかなれやしないもの」

早苗は自嘲するように言った。

「いえ、私だって同じですよ。思った以上に、望くん達に肩入れしていたみたいです……」

沙月も自身が些か以上に入れ込んでいるのを理解せざるを得なかった。

監視としてきたのに、何という体たらくであろうかと内心で自嘲する。それが悪いことだとは思っていないし、それによつて引き起こされた自身の変化は好ましいとは思っているが、公私混同しすぎたのも事実であつたからだ。

「サツキまで……!なんであんな奴を擁護するのだ!」

主である望を蔑ろにされたように感じたレーメが爆発する。

——が、即座に鎮火することになった。他ならぬ望の手によつて。

「レーメ、希美も落ち着いてくれ。そりゃ、確かにいい気はしなかったけど、先生の言ったことは全部本当のことだ。結論だつて、ぐうの音も出ない真つ当なものだった。それで怒るのは筋違いだろう?」

「ノ、ノゾム。わ、吾は汝の為に!」「望ちゃん……」

「俺の為に怒ってくれるのは嬉しいけど、事実を言われて怒るのは違うだろう?」

涙目のレーメと、幾分落ち着きを取り戻した希美の頭を、望は不器用に撫でる。

「それに、永森先生も私達に自覚を促す為に、わざとあんな言い方をしたんでしようしね……」

「あつ、やっぱりそうですよね？」

「ええ、でなければ、あそこまで辛辣な言い方はしなかったと思うわ」

早苗が付け足すように呟くと、我が意を得たりと沙月も頷く。

「ふん、あの男にそんな崇高な考えがあるものか！」

「そうなんですか？」

レーメは余程久遠が嫌いなのか、聞く耳を持たない。希美が思い返すように聞く。

「ええ、恐らく永森先生はこう言いたいのだと思うわ。危機感が足りないってね」

「危機感ですか？」

沙月の説明に望が首を傾げる。

「こう言つては何だけど、改めて考えてみると私もそう思うわ。置かれた状況に対して、私達は些か以上に危機感が足りてないのよ」

「早苗お姉ちゃん、どういうことなの？」

「いい？今、私達はとんでもない状況に置かれているわ。幸いのもみんのおかげで、それ程苦勞していないけど、本来ならもっと切羽詰まっていたと思うの」

そこから早苗は語った。ものべーがいなければ、外敵に怯えて寝食する住居に困るところか、水を得るのも一苦勞であったろうこと、食糧問題は深刻極まり、トイレなどの処理も大きな問題になっていたであらうことを。

「えーと、恵まれすぎているってこと？でも、それって悪いことじゃないよね？」

希美は何が悪いことか分からず、疑問符を浮かべる。

「ええ、勿論よ。希美ちゃんともものべーには本当に感謝しているわ。でもね、それは同時に私達から危機感というか、危機的状况になる実感を奪っていたの……！」

沙月はそこまで語って、ハツとした。

実感が薄い、危機感が足りないからこそ、不満が容易く噴出する。そして、信介や美里の申し出も同じだ。神剣使いでもない彼らが、自発的に外の探索を申し出る。それは致命的な危機感の欠如だ。未知への好奇心の方が、危機感より勝っているということに他ならないのだから。

「沙月ちゃんも気づいたみたいね。危なかったわ。あのまま阿川さん達を行かせていたら、どうなっていたことか……。止めてくれた永森先生には、感謝しないと」

「うーん、よく分からないんだけど、そんなにまずいんですか？」
望が微妙な表情で問う。どうにもピンとこないようだ。

「そうね……。いい、望くん。私達は、本当はとんでもない状況にいるの。本来なら明日をも知れない状況だったはずなの。こんな談笑することはおろか、のんびり寝ている暇もなかったはずなのよ。そうならなかったことは、本当に喜ぶべきこと。」

でもね、それは諸刃の剣なのよ」
沙月は口に出しながら、はつきりと理解する。今の状況は危険だと。

「永森先生以外の全員、ここにいる皆も含めて、致命的に危機感が足りていないのよ。なまじ余裕があるから、余計なことを考え、余計なことをする。置かれた状況を正確に認識しているのなら、そんなことする余裕なんて少しもないのよね」

「……先生が最初に現状認識をしたのは、相応の意味があったということ？」

「そう、あそこで気づくべきだったわ……。でも、仕方のないかもしれない。今も私は、どうにかなると思っただけのもの」

希美が確認するように問うと、早苗が悔やむように答える。

「それは悪いことではなからう？希望を持てるのは良いことだ」
「……それが他力本願じゃない現実的希望ならね」

「!?!」

望、希美、レーメがその言葉の意味するところに凍り付く。

「今の状況は本当によくない。このままだと沙月ちゃんはもちろ

ん、望ものぞみんも、全校生徒達から頼られっぱなしになってしまいわ。それではいけないのよ」

「しかも、不満がたまれば、真っ先にその捌け口になるのも、私達になるでしょうしね」

早苗の言葉を継いで、沙月が続ける。

「だが、それとこれとは話が別だろう！優先順位とか、決める必要などなからうに！」

「いいえ、あるのよ。じゃあ聞くけど、レーメちゃん。私と希美ちゃんが同時にピンチになったら、どっちを優先して助ける？」

「む、むう……」

「ほら、その迷っている間に二人とも死んじゃうわ。いざという時に動けるように、どちらかでも確実に助けられるように、永森先生はああ言ったんだと思うわ。こういう状況にあると言うに、決める必要がないなんて言えてしまう——危機感が足りない証拠でしょう」

沙月はレーメに言い聞かせながら、自身も戦士としての己に立ち返る。「斑鳩沙月」を捨てるわけではない。ただ、ぬるま湯につきりすぎて、想像以上に鈍っているのも事実だ。こんな当たり前のことで、心を乱しては、この先やってはいけないと。

「ぐ、ぬう」

レーメは最早何も言えなかった。些か以上に主に甘い神獣だが、それでも彼女は永遠神剣の意思の具現だ。闘争のなんたるかを本能的に理解している。両者の言い分の正しさを、無意識の内に認めていたのだ。

「とにかく、気合いを入れ直させてくださいですか？」

ここまで言っても、どうにも実感がわかないらしい望がそんなことを言った。

まあ、無理もない。彼は沙月のような歴戦の戦士ではなく、早苗程の社会経験もないのだから。

「まあ、望はそれでいいと思うわ……」

「望くんは、その内嫌でも理解することになるから、大丈夫よ」

なんともいえない表情で、早苗と沙月はそう言うと、互いに顔を合

わせて苦笑したのだった。